

魔法使いが来る！

ケモミミ愛好家

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

魔法の指輪…『ウィザードリング』

アカメが斬る！の世界に転生したバカ共は、

その力を両手に宿し、絶望を…笑いに変える。

# 目次

俺達が転生する！	1
バカが食う！	45
神は言う！	56
疑問を解く！	94
物語に出合う！	113
フラグが建つ！	154



俺達が転生する！

とある公園、そこに停まる1台のワゴン車。

そこには『はんぐり』と書かれた暖簾があつた。

世間で言う移動販売のドーナツ店である。

そこにある簡易式の椅子に腰かける2人の若者がいた。

「そーいやそろそろ、アカ斬るの新刊発売だっけか。」

「まじで?!マヨネーズ買い足しとかねえと」

「何でマヨネーズが要るんだよ?!」

「だってあれ読むと暗くなんだぜ？」

元気を取り戻すには、マヨネーズが必要不可欠だろうか」

そう言いながら、天然パーマの青年が手にしたドーナツにマヨネーズを盛大にかけ始める。

「あゝ…もつたいない…」

それを向かいで見っていた黒髪の青年は呆れた顔をし、ため息をついた。

「食うんだからいいじゃんか」

そう言ってマヨネーズを乗せたドーナツを方張る青年は、満足そうな笑みを浮かべた。

「やっぱマヨネーズは何にでも合うな！」

「見てるこつちが吐きそうなんだが…」

黒髪の青年はそう告げると、手元のコーヒーを口にする。

「そーいや兄ちゃんは就職決まったの？」

「まあ、なんとかな」

黒髪の青年は疲れ切った声で答えた。

他愛の無い日常の会話、2人の兄弟はいつもの様に話しをする。

周りでははしやぐ子供達の笑い声、噴水から聞こえる水の音、ただ単に続く平和な日常。

この日、この2人の兄弟の平和な日常は、  
“終わった”。

「なあ……何かあの車変じやね？」

「言われてみれば……」

ヨロヨロと蛇行するトラック、その行き先に目をやった2人は、目を見開いた。

「やっべ?!」

「マジかよ?!」

2人は走り出した。

トラックの行き先へ、

そこにいる小さな2人の子供に向かって。



気付けば視界は低く、酷くぼやける。

体中が痛む、息が出来ない。

ふと横を向けば、地面に倒れた自分の弟が、その奥で泣き叫ぶ2人の子供、騒ぎ集まる外野の人達。

青年の意識は、ここで途絶えた。

――

……目覚めなさい……

「zzz……」

「グゴ……ガー……」

……目覚めなさい……

「……ん……zzz……」

「フガツ……ゴガー……」

……目覚めなさい……

「…………んあ……zzz…」

「ガー……ズゴー………」

…………あの……

「zzz…」

「フゴー………」

…………起きてくれませんか？……

「ん……後5分………」

「俺は気分………」

…………えつ……と……

「zzz………」

「フガー……」

起きろつつてんでしようが!!

「…んだよ、うるさいなあ…攻也起きろ…お袋がうるさい」

「いいんだよ、ほっとけ……今日は学校サボる…」

「誰がお袋じゃあ!!」

「うわっ?!」

2人の青年が驚き辺りを見回す。

そこは白一色、何も無い空間だった。

ただ1人、赤みがかった髪の少女が2人の前で腰に手を当て、立っていた。

「えっ誰?」

s i d e  
???

誰だ？この女？

どっかで見たことあるような……無いような……

てか、ここどこだ？

辺り見回しても白、白、白。

目が痛くなる。

「えー……と、……攻也、お前の彼女？」

「んな訳ねえだろ兄ちゃん」

「だよな」

「兄ちゃんの彼女じゃないの？」

「俺に彼女がいると？」

人生で1度と無くモテた事の無い俺に彼女だと?」

「ゴメン兄ちゃん!」

弟の返事に俺はキレ気味で答えると、弟の攻也はあわてて返した。

「はあ…確かに可愛いが、おっぱいが小さいな…顔は好みだがスタイルはもう少し欲しいかな」

「兄ちゃん巨乳好きだからな。」

俺はこれくらいが好みかな」

俺達の会話を聞いていた目の前の女は顔を赤くし胸を隠す。

「信じられない?!普通初対面の女性に胸の話する?!」

そう言われてもな……

とりあえず…

「なあ、ここどこだ？」

俺は目の前の女に質問すると、女は自慢気に語った。

「ここは死後の分岐点、貴方達は死んだの」

…

…

…

………はあ？

ナニイツテンダ？コイツ……

「貴方達は死んだの、ここは死後の世界。

正確には死んだ後に、天国に行くか、地獄に行くか、そして… “転生” するかを決める場所」

淡々と話し続ける女、俺は自分が死んだ事を実感できないでいた。

「あのだ」

「何？」

「俺達は死んだのか？」

「そうよ」

俺の質問に女は、冷静に、冷酷に、あつさりと答えた。

「マジかよ……」

隣では弟の攻也が仰向けに寝転がる。

ただ俺はまだ女の言葉を信じられず、死んだ事を確かめる方法を模索していた。しばらくし、一つの案を思い付く。

俺はゆっくりと、右手を女に向け開く、そして……

ムニユツ……



「ふえっ？」

ムニユ、ムニイ、ムニユ

俺は女の胸を揉みし抱いた。

なぜか…

よくマンガ等で夢か現実かを確かめる手段として、頬をつねる行動がある。それと同じようなものだ。

脳に刺激を与える。

そのために胸を揉む。

だつて自分の頬つねるとか痛いじゃん。

「なっ?! な、な、…なにすんのよ!!」

「グバラッ」

「兄ーちゃんー!」

アッパーを受けた俺は、勢い良く吹き飛んだ後、地面に叩きつけられた。

だがおかしい……

「痛い……」

そして右手を見る。

「柔らかい……」

痛覚、触覚はある。

ホントに死んだのか？俺らは……

ふと自分が元に居た場所に目を向けると、赤髪は胸を手で隠し吠えている。

「信じられない!!普通、初対面の女性の胸揉む?!

ましてや女神よ?!女神の胸を揉むなんて聞いたことないわ?!」

ギャーギャーわめく赤髪は、俺を睨み付けてくる。

……?

今アイツ……

「なあ、攻也？今アイツ自分の事『女神』って……」

「ああ……言っただな」

「そうよ！私は女神よ」

フフンと鼻を鳴らし、ドヤ顔で仁王立ちする赤髪がいた。

「まさか……嘘だろ……」

「本当よ」

いまだに仁王立ちを続ける赤髪を見て、俺と攻也は互いの顔を見た。

「どう？恐れ入った？」

「イタタタタ、痛いよ〜お母さ〜ん」ここに頭怪我した人がいるよ〜

「ちよつとどういう意味よ?!」

「どう…つて…なあ?」

「ああ、その年格好で自称女神は…」

「本物よ!!」

すると赤髪はポーズを変えて話し出す。

「私は死んでしまった人の魂を導く女神、ユリーナよ」

「イタタタタ、痛いよ〜お父さ〜ん」絆創膏持つて来て〜、出来るだけ大きなく、人一人包み込めるくらいなの〜

「いい加減にしなさいよアンタ達」

握り拳を震わせながら自称女神は言い放った。

「なら証拠見せて貰おうか」

攻也は自称女神（笑）に喧嘩腰で話しかける。

「……………」

何か睨まれてる？

「良いわよ。

見せてあげる」

そう言って自称女神（笑）は小さく深呼吸すると、身体が浮き出した。

「どうっ？」

「どう…っって…」

「地味」

「ちよつと！これ結構大変なのよ?!」

「そう言われてもなあ…」

「てかスカートで浮いてるとパンツ見えるぞ」

「ツ?!…アツ…キヤアツ?!」

動揺したのか、自称女神（笑）はスカートを押さええながら落ちた。

「大丈夫かー?」

「誰せいだと思ってるのよ?!」

「いや、自業自得だろ」

そう言い放った攻也に自称m…

「黙ってればさつきから自称女神（笑）って…私は正真正銘の女神よ!!」

……?

「言っておくけど、貴方達の心の声なんて丸聞こえなんだから」

……マジで?!

「マジよ」

ドヤ顔で俺を見る自sh…「ん？」…女神は俺達を指差し、こう言った。

「疑うなら心の中で何か言ってみなさい。

当ててあげるわ」

そう言った瞬間、鬼の形相で女神は弟を殴り飛ばした。

s i d e  
??? o u t

—————

s i d e  
攻也

心を読む?!

信じらんね。

「疑うなら心の中で何か言ってみなさい。

当てるわ」

よし、やれるもんなら当てるみやがれ!

(やーいやーい縞パーン。縞縞パンツ♪)

ふつ、心の声なんて聞こえる訳n……

「ゴッドハンドクラッシャー!」

「ブヴェアアア!」

気づけば俺は頬に走る激痛と共に宙を舞っていた。



「おい、大丈夫かー？」

俺が元いた場所から、兄ちゃんが呼び掛ける。

「マジで…読めんのか……っ」

俺は女神の実力を文字通り身をもって知ると同時に、意識を手放した。

s i d e   攻 也   o u t

s i d e  
???

「もう…嫌…何なのよコイツら…」

よよよと泣き出しそうな勢いの女神は涙混じりに愚痴り出した。

「何って、人様を訳の分からない空間に閉じ込めた上、睡眠の妨害、あげくの果てには自分  
は女神だなんて言うほうが頭おかしいだろ」

「兄ちゃん、アイツそろそろ泣いちゃうぞ?」

「お、眼が覚めたか…ったく、しゃあねえな」

俺は頭をかきむしりながらため息をついた。

—————

「本題に入るわ」

泣き止んだ女神は立ち上がると、さつきまでのおふざけを忘れさせる様な、真面目な顔と声で話し出した。

「あなた達にはある世界に転生してもらいたいの」

「ある世界？」

転生？

……どこにだよ？」

「いわゆる物語の世界よ。」

貴方達の世界では小説やドラマ、漫画などの世界はフィクションであり所詮は創作物に過ぎないけど、生まれた瞬間にその世界は実在するの。

貴方達の世界に創作物として実在したように、その世界そのものも実在すると言う事。

逆に貴方達の居た世界は、他の世界では夢や創作物に当たる、解るかしら?」

「ああ……何となく解る。」

「……つまり俺達の世界は、他の世界では漫画やドラマ、小説として存在するって事だよな?」

「ご名答……他の言い方をするなら……パラレルワールド、多重世界理論ってところかしら。」

貴方達の知る創作物の世界は実在する、そこに貴方達は転生するのよ」

「なるほど……転生ってそう言う事か……」

「どういう事だ?」

俺と女神が話しに納得していると、話しを理解出来ていない馬鹿が1人、口をはさんだ。

「ハア……」

「貴方……さっきの話し、理解して無いの?」

「ばっ……バカにすんな!」

確かに数学は苦手だけど……体育と歴史は得意なんだぞ!」

「数学の話しなんかしてないんだけど…」

弟の馬鹿さ加減を知らない女神は困惑していた。

そうだよな…

心が読めるからって全部が分かる訳じゃない。

「あ…」

ゆりっぺ、お前女神なら俺らのパラメーター？

能力値みたいなの見れないか、それで分かると思うわ」

俺は女神ゆりっぺに助け船を出した。

「ゆりっぺ?!」

何よそのあだ名?!

何でここに来た奴の大半はそのあだ名を付けるのよ?!」

「いいから、さっさとしろ」

「え……」

えく……と……」

ゆりっぺは手に本を出現させると、それを読み始める。  
読み進めて行くと、その表情は困惑から絶望に満ちた、真つ青な顔になっていた。

「な、何よ……これ……知能……9?!

冗談でしょ?!

鳥でも二桁あるわよ?!」

「因みに俺は?

人並みなのか?」

数値の基準が分からない俺は、自分の数値を聞いた。

「貴方は……31ね。

平均値、人間は大体30〜40が平均よ……」

「まあそんなもんか」

「因みにカマキリは6、蜘蛛は15よ……」

「アイツの知能カマキリ以上…蜘蛛未満か…」

「俺ってそんなに凄いのか…」

「流石俺だな、うん！」

「ああ…凄いよ……」

今の会話から自分の知能が優れてるって、勘違いしてる辺りから」

「こんなの転生させて大丈夫かしら…」

俺とゆりっぺは同時にため息をついた。

「そーいやあ、俺らどこに転生つてのするんだ？」

「さあ？」

「あ！でもごちうさやラブライブなら大歓迎かも。」

「城下町も捨てがたい……まあ平和な所なら、なんでもいいや」

「やっば平和が一番だな」

俺達が転生先の話しをしていると、ゆりっぺは思い出したかの様に話し出した。

「そう言えば言っただけ無かったわね。

あなた達の向かう世界……それは……

……  
……  
……  
「アカメが斬る！」の世界よ」

「よし！断る!!」

「即答?!」



「当たり前だ、何が悲しくて新しい人生を悲惨な世界で過ごさなきゃいけないんだ！」  
「なあゆりっぺ、他には無いの？」

「え？ち、ちよつと待つて……えく……と」

ゆりっぺは辞書の様な物を取り出し、ペラペラとめくりだす。

「やっぱりアナログだなあ……」

「うるさいわね！」

「……えくと……あつた！」

進撃の巨人 「「却下」」

……北斗の拳…… 「「断固辞退する」」

テラフォーマーズ 「「チェンジで」」

……じゃあ……ゴッドイーターは？」

「生アリサに生アネットに、生カノンちゃんか……興味あるな……」

「ああ、生でアリサたんを拝見してみたいし」

「じゃあ!!」

「だが断る！」

「何だよ!」

「この俺が最も好きな事の1つ、それは…

自分が絶対的優位だと思っている奴に、NOと断つてやることだ!」

「訳分かんないわよ!じゃあ聞くけど、どこなら良いのよ?」

「どこって…他には?」

「ブルージェンダーでしょ、ブラック・ブレットでしょ、コープス・パーティーにマブラ  
ヴォルタ…後は…」

「アナザー」

「何でろくでもない選択肢しか無いんだ?!

嫌がらせか?パンツ見た嫌がらせか?

それともその貧相の胸揉んだ仕返しか?!

「兄ちゃん落ち着け」

「これが落ち着けるか?!

お前アニメとかあんまり見ないから悠長にしてられんだ?!

何でホラーとかサスペンスとか崩壊世界の類いしか無いんだ?!ええん!?

何かこう…緩やかなフワツとした、平和なのは無いのかよ?!」

「無いわよ」

「即答?!」

今にも暴れ出したい気持ちを抑えながら、ゆりつぺを睨む。  
ーくっつその駄女神、もっかいその乳揉みしだくぞ

「勘違いしないで。

これは嫌がらせとかそんなんじゃないから…  
って?!その手の妙な動き止めて?!」

ーおっといけない…

俺は無意識に左手をワキワキしていた。

「オホンッ…

実はこれには深い理由があるの」

わざとらしく咳払いをした駄女神は真面目モードで話し出した。

「元は貴方達の言うような世界もあったの、平和な世界とか…」

でも大体の人達は刺激のある、自分が活躍できる新しい人生を求めて、わざと危険な世界に転生する人が絶えなかったの。

でも実際に転生した人達はその過酷さに耐えられず、リタイア…中には自殺する者まで出てきたの…」

「転生特典とか無いの？」

よく二次小説とかであるけど」

「与えたわよ…」

イマジンプレイカー  
幻想殺し、

アクセラレーター  
一方通行、

キングストーンやギアス、悪魔の実とか、イノセンスにその他色々…

チート涙目的な、滅茶苦茶なのをね…

でも力を与えたところでその人自身、精神は変わらない。

それが原因で脱落者が後をたたないのよ」

「なるほど…」

でも、なら何で俺達なんだ？」

駄女神の話しに納得した俺は、最大の疑問を投げつけた。

「一応天界の方で基準を定めたの。

精神力は勿論、体力、知力、環境への適応力、その他いろいろ。

何項目かあって、その全体の80%をクリアすれば、その人の希望する世界に転生させてるの。

ただ基準値を大きく上回る人は、出来る限りそういった危険な世界に転生して貰ってるの。

特に貴方達は精神力に関して異常なまでに高い数値を出してるから、その為ね」

「精神力って…それってどういう事なんだ？」

「分かりやすく言えば、絶望しづらい」

「え？」

「それだけ？」

「そうだけど、これはかなり凄いことよ？」

俺と攻也はその凄さに気付けないからか、駄女神は話し続けた。

「つまり戦争の無い、平和そのものな世界の人達は特に打たれ弱いわけ。

例えるなら、エサを必ず貰える動物園で暮らしてきた人懐っこいライオンを、いきなり自給自給の喰うか喰われるかの極限サバイバル状態のサバンナに放り出す様な感じかしら」

「分かるような、分からないような…」

「つまり、平和ボケしている奴をそう言う世界に転生させても役に立つどころか、逆に迷惑になると…」

「そ、前は酷かったのよ?」

ゲームやマンガでその世界を熟知してるつもり引きニートやオタク、その逆のチンピラからギャル、一般的な社会人にマフィア、ヤクザ何かも転生させたけど、皆3日も持たなかったわ」

「3日って…」

「その世界を熟知しても、生きる術を知らない引きニートやオタク、逆に生きる術を知っても、その世界を知らず呑み込まれる人……」

男は奴隷になるか殺されるか、女子供は売られるか犯されて野郎の慰めものになるの

が今までのオチよ」

「ええく…」

あまりの転生による問題に俺と攻也は軽く引いてしまった。

「でも貴方達は問題ない。でしよ？」

「輪島 創太」

輪島 攻也

貴方達にはアカメが斬るに対する知識がある。

そして、その生い立ちから身に付けた、生きるための術も」

するとゆりっぺは俺を見つめる。

「そして…輪島 創太。

貴方は今までの人達にはなかったものを、持っている。

いえ、〃経験〃している。

貴方達をこの世界に転生させる最大の理由…」

「おいー！ゆりっぺ!!」

次の台詞を言おうとするゆりっぺを、攻也は叫んで止めようとする。

「攻也…別にかまわない」

俺は攻也の肩に手を置いてそれを止めた。

「別に、貴方『だけ』を転生させても良いのよ？」

「ざけんな。」

俺も行くに決まってるだろ」

挑発的な笑みで俺を見るゆりっぺと、俺の間に割って入った攻也はそう告げた。

「なら貴方達に『力』を授けましょう…これよ」

そう言って女神が出したのは、銀色の本体に金で縁取られた、黒い手の形した装飾が



付けられたバックルの様な物と、黒い本体に左右2ヶ所に何かをはめるような凹みのある突起、そして扉を模した銀色のカバーが付いたバックルの様な物だった。

「っ?!これって……」

「黙クワイザードたら死ぬ魔法の手と大飯食らいの居候?!」

「ちよつと何よ?!その悪意に満ちた呼び方?!」

「いや、だってなあ?」

「ああ……これは予想外だったわ……でも何でコレ?」

「だってあんな世界にカプトにフォーゼ、ファイズやドライブ何か行ったら、世界観ぶち壊しじゃない」

「『そんな理由?!』」

「……まあ、確かにメカメカしたのは合わないわ……」

「ああ、俺マツハになりたかったなあ」

「俺はファイズかドライブかな。」

まあ、支給品に文句は付けないけどよ……

「こう言うのって、俺らを選べるもんじゃないの?」

「ああ……確かにそうだけど、貴方達はこっちの都合で転生先を決めてしまったから、そのお詫びとして3つの特典を付けてるんだけど、装備の方はこっちから貴方達に最適な

物、そしてその世界に悪影響を与えない物を支給する様になつてるの。

特典の内容は装備、スキル、そして本来の特典となる願い、その3つよ。

それは装備で、あくまで戦う為の力、武器に過ぎないから。

ちゃんとスキルと願いは別に用意させて貰うわ。

じゃあ、まずはスキルから。

どんなのが良いかしら?」

「じゃあ、どんな相手でもモテモテになるスキルで」

「モテる以外に望みは無いの?!」

「だって装備は上物っぽいし、他に要るものってな?」

「ん〜…あ!マヨネーズ!!」

「それはスキルじゃないだろ…」

あ、あつたわ」

「何かしら」

「絶〇体質」

「……は？」

「だから、〇倫体質」

スパアーツン!!

「面倒だわ、この中から選んで」

「良い蹴りだったぜえ…」

俺は顔全体にひろがる痛みにも絶えながら、ゆりっぺの出した資料に眼を通した。

「透視に透明化、洗脳に催眠…くっそエロ系に使えるスキルが全部消されてやがる。」

「しやあない…じやあ俺は無難に身体能力の向上で」

「俺は…この索敵スキルでいいかな？」

「良いわ」

そうやってゆりつぺは俺達を選んだスキルの資料を手にした。

「じゃあ最後に願いなね。

貴方達の願いを言いなさい。

どんな願いも叶えてあげましょう。

「お前の払う代償はたった一つ……」

って！横からチャチャいれないですよ！

「じゃあ、コネクトの魔法で好きなときに好きなだけ無制限にプレーンシュガーを取り出して食べるようにしてくれ」

「あ！じゃあ俺はそのマヨネーズ版で」

「分かったわ……」

これで全手続きが済んだわ」

すると俺と攻也の足下が光だし、魔方陣の様なものが出てくる。

「さあ、行きなさい。」

絶望に満ちた世界の、新たな希望になることを願います」

ーいつちよまえな事言いやがって…

「最後までいい女神らしくさせてよ!」

そのゆりつぺの伏え面を最後に、俺の視界は光りに包まれた。

「……ん？……んは……」

俺達は眼を開くと、さつきとは違う場所にいた。  
取り合えず……

「寒っみいいいい?!」

「何でこんなに……つて?!雪?!」

「当たり前一面真っ白だぜえ……」

何で雪山からのスタート?

モン○ンポーターダブル2ndじゃねえんだぞ!

「……ま、取り合えずは……」

「宿、探すか……」

こうして俺、輪島 創太と弟の攻也の新たな人生の幕が開かれたのである。



バカが食う！

「だあああああああああ！

いつまで歩きやいいんだよ?!」

「五月蠅いぞ攻也…」

俺、輪島 創太は弟の攻也と一緒に《アカメが斬る!》の世界に転生した。  
だが何故か今は雪山の中を延々と歩いていていた。

「まったく、スタートは帝都かどつか適当な村で良いじゃん。

何で雪山何だよ」

「知るか、理由ならゆりっぺに聞け…」

俺達の新人生がまさか雪山のど真ん中からスタートするとは、俺も予想していなかった。

「…っーか、腹減った」

「俺も」

攻也の愚痴に同意しながら、俺はポケットから1つの指輪を取り出し、手のひらを模したようなベルトのバックルにかざした。

《コネクト…プリーズ》

すると魔法陣が展開され、そこに腕を入れる。

腕を出せば、手には好物のプレーンシユガーが…

「つて?!あ” あ?!」

取り出したプレーンシユガーはすでに手から消えており、かわりに攻世の手にはマヨネーズがぶつかけられた、変わり果てたプレーンシユガーが乗っていた。

「返せ！俺のだろうが」

「良いじゃんか、無限に出てくるんだから…」

うんま〜〜〜い！」

「ったく…」

《コネクト…プリーズ》

再びコネクトの魔法でプレーンシユガーを取り出したほうばる。

「つーか、ドーナツだけしか出ないのかよ」

「てめえだつてマヨネーズしか出せないだろうが…」

「……………はあ…」

互いのミスに愚痴りあいながら歩く。

「何でコネクトで、何でも取り出せる」にしなかつたんだろ…」

「後悔先に立たずとはよく言ったよ…」

—————

「そーいや攻也」

「ん？」

「お前、ハイパーリングとミラージユマグナム有ったか？」

「ああ？うなもん……あれ？……無い?!」

「やっぱか……」

俺は予想通りの結果に肩を落とした。

「やっぱって、兄ちゃんも？」

「ああ、インフィニティリングにフィニッシュとラッシュユリングが無かった。

後は……」

俺は2つのリングを取り出し、攻也に見せた。

「何だこれ？……濁ってる？」

「ああ、ドラゴン系のスタイルリングにスペシャルリングがこんな風に濁ってんだよ」

俺はリングを仕舞いながら推測を話した。

「多分だが、このドラゴンの指輪はまだ使えないだけで、何か条件が合えば使える様になると思う」

「最初から楽は出来ないって事か？」

「じゃあ、俺のハイパーやミラーージュマグナムは？」

「原作が関係あるか分かんないが、あれは確か遺跡で発掘されたから…もしかすると、どっかの遺跡にあるかもしれないな」

「ううわ、面倒っ…」

「じゃあインフィニティも同じかもって事か？」

「もしインフィニティが原作通りなら、むしろ手に入らない可能性が高い。」

「そもそも俺は、無い事に納得してるんだよ」

「え?!何で」

「そもそもインフィニティって、魔法石は存在しないんだよ。」

「あれは晴人の涙に反応して結晶化した、ウィザードドラゴンと晴人自身の魔力だから、晴人じゃ無い俺がインフィニティを生み出せる訳がない。」

「よって、無い物は使えない。って事だ」

「ふん」

俺の推測を理解出来たのか、攻也は黙り込んだ。

——ぐう~~~~

「腹減って頭が回んねえ…」

ーやっぱコイツバカだ…

「お?…おお?!あれキノコじゃね?」

そう言つて指差す攻也。

俺は攻也の指差す先に目を向け、絶句した。

「いや、弟よ…」

あれは確かにキノコだが、ダメなやつだ。

見ろ、紫色で尖っている…毒だ」

「大丈夫だって。」

よく見た目の悪い物ほど旨いって言うじゃん」

「いやダメだって。」

あれはヤバイやつだ。

土管潜りとコイン集めが趣味の、キノコ中毒の赤帽子のオッサンでも手を出さないやつだよ」

「大丈夫だって。」

それにほら、あれが毒でも俺には「コレ」がある」

そう言つて攻也は今日一番の笑顔で笑う。

その指には「ドルフィンビーストリング」がはめられていた。

「いざと成れば、コレで毒なんてチョチョイのチョイだけ」

《Go!コネクト!》

「さあマヨネーズ<sup>相棒</sup>、出番だ」





「即効性?!

解毒とかさせないレベルの猛毒?!

しかも口や鼻から血が吹き出すとかグロ過ぎるだろ?!

「おい攻也、大丈夫よ…攻也?」

「ヘンジガナイ、タダノシカバネノヨウダ。

「……………」

転生人生初日。

わずか数時間足らずで弟の人生は、幕を閉じた。

魔法使い

残り 1人

神は言う！

「はあ……俺はこれからどうしたらいいんだ」

俺は攻也を適当な平地に埋め、そこらの木で簡単な十字架を作りつつ刺した。

「最期までお前はお前だったな……バカ丸出しの死に様だったよ、攻也……アーメン」

俺は適当に十字をきり、近くの倒木に腰かけた。

「ハア……ラーメン食いてえ」

ーボコツ…

「ん？」

「勝手に埋めるなああああああ!」

「つうおおおお?!」

突然の死者蘇生、リビングゲテッドの瞬間を目の当たりにした俺は、倒木から転がり落ちた。

「勝手に埋めんよ?!」

息できねえし、マジ死ぬかと思ったあ…

あ、そーいや死んだんだったな、俺」

「ビックリした…よく生き返ったな…」

「ああ、実は…」

――数分前

side 攻也

「いったただつきまゝす！」

「何だ全然旨いじゃん。」

少し舌が痺れて喉が痛いけど、コレならドルフィンリングで消せるな。

「なん<sup>何</sup>ふ<sup>だ</sup>あ、ふ<sup>全</sup>えん<sup>然</sup>ふ<sup>平</sup>えん<sup>気</sup>ふ<sup>じ</sup>えい<sup>や</sup>ひふ<sup>あ</sup>…グボオツア?!」

俺の意識は、ここで途切れた。

ーーー神は言っている…

ここで死ぬ運命さだめでは無いと…



「……………つて?!猛毒じゃねえか!!

……………あれ?…夢……………」

辺りを見渡せば、俺は見覚えのある場所にいた。

「何だ、夢か。」

ああ……ビックリス 「したのはこつちじゃああああ!」 グハアツ?!」

突如背後からの衝撃に、俺は吹き飛んだ。

顔面スライディングから起き上がり背後を見ると、そこには怒り狂ったゆりつぺがいた。

「信じらんない?! 4時間よ4時間?!

転生して4時間で死亡?!

しかも死因が道に生えた毒キノコを食べたから?!

貴方バカなの?! 死ぬの?!

ああ、バカだから死んだんだったわね?!

ごめんなさいね!!」

うるせえな、好き勝手言いやがって…

「仕方無いだろ、腹減ったんだから」

「仕方無く無いわよ?!」

前代未聞よこんなこと?!

転生して数時間内で死ぬなんて?!

しかも毒を盛られたのじゃなく自分から食べるなんて?!」

「じゃあねえだろ…あんなに毒が強いとは思わなかったんだよ。

それに毒が強いかなんて、食ってみないとわかんねえだろが普通」

「普通は毒キノコ食べようなんて思わないわよ!!」

それにあれはどう見てもアウトよ!!

弟に身長負けてるビールっ腹の赤帽子被った髭のおっさんでも絶対に手を出さないやつよ?!」

「キノコ絡むとその話ばっかだな…」

てか、見た目で判断するのはどうかと思うぜ?

イタリア料理や西木野 真姫ちゃんの好物で有名なあのトマトですら、ベラドンナに似た姿とその赤さから、悪魔の供物やら毒を持った野菜やら、果てには人間の血で育てられたなんか言われて、観賞植物として扱われて、食べ物としては見てもらえなかったんだぜ?

当時の貧困民が餓死するくらいならと死を覚悟して食った事で、初めてトマトは食え

るんだって事に人は気付いたんだ。

ちなみにトマトはナス科の植物で、初めて日本に伝わったのは17世紀半ば、当時は赤茄子あかなすや唐柿とうし、小金瓜こがねうり、蕃茄ばんかと呼ばれ「何でバカのくせに、トマトに対してそんな博識なのよアンタは?!」

大声で怒鳴り散らすゆりつぺ。

俺は耳を塞ぎながら怒号がおさまるのを待った。

「何だよ……文句ばっか言いやがって…

あ!……1つ頼んで良いか?」

「え?……いいけど、今回限りよ」

s i d e 攻 也 o u t

「……って事があった」

「ふくん……よくゆりっぺはお前を生き返したな」

「ああ、何でも俺達2人が揃わないとダメらしい」

「揃わないとって……それって、何回でも生き返るって事か？」

「いや、確か俺達以外に俺達の死を認識されたら出来ないらしい」

「……つまりは見られたりしない限りは、何回でもリトライ可能って事か？」  
(でも何で?)

「それとコレ、兄ちゃんに渡してくれって、ゆりっぺから」

「っ?!……おいおい……冗談だろ……」

俺は攻也の取り出した指輪を見て、冷や汗をかいた。

攻也の取り出した指輪、それは紫色の魔法石で作られた太陽、そしてそれに重なる月の装飾が施された指輪だった。

「何でコレまで…」

取り合えずしまっておこう…

そう思い俺は、指輪をしまおうとした時、あり得ない光景を目の当たりにした…

「つて！…また食うのか?!」

そこには再び毒キノコにマヨネーズをかけて食べようとする攻也<sup>バカ</sup>がいた。

「大丈夫だって。

今回はスキルを変更したから」

「変更?」

ゆりつぺに頼んだのって、スキルの変更だったのか？」

「ああ、〃毒では死なない〃 ってな。

コレで毒キノコを死なずに食える。

やっぱ俺、天才だわ」

そう言いながら攻也は、再び毒キノコにマヨネーズをかけて食い始めた。

瞬間……

「グボオツア?!…な、何で……?!

オ〃 オエ〃 エエエエエエ?!

…ハア…ハア…血が…止まんねえ?!

か、体が…し、痺れ……」

(ああ…ホント、コイツは……)

「なあ…たぶんそれ、毒では死なくなっただけで…

毒の効果や影響は受けてんじゃね？」

「ど…どゆこと？」

「いや…多分だけどお前のスキル、  
“死かない”であつて“効かない”  
じゃないから  
じゃないか？」

「そんな…グボオツア！」

「取り合えずドルフィンリング使え。」

毒で死ななくても、そのままだと失血死するぞ」

「お”う…」

—————

「あゝあ、辺りが血の海だ」



俺は足元に広がる血の海を見て眩いた。

「そんな事より俺の心配して？」

「知るか、自業自得だ」

ーグルルルル…

「何か言ったか？」

「何にも？」

「……………」

「何か…生臭いな」

「俺の血じゃね？」

「いや、血の臭いじゃないだろ…コレ」

「何か、背中に生暖かい風が当たるんだけど…」

「奇遇だな、俺もだ」

「……………」

ーグルル…

「最初はグー! じゃんけんポンツ!」 あっち向いてホイツ!

「……………」

俺の指がさした先を見た攻也は固まり、涙を流し初めた。

「…何がいるんだ?」

「…グスツ…全身密に生えた毛皮に大きな体、犬の約7倍近い嗅覚を持った…グスツ…  
冬なら本来…冬眠しているはずの生き物ってなくんだ (泣)」

「…熊?<sup>くま</sup> (泣)」

「……………スンツ…正解<sup>せいがい</sup> (泣) ……」

ーグマアアアアアア!!

「イアアアアアアア?!」

互いに悲鳴を上げながら、俺達は全速力で走り出した。

「何で?!何で熊がいんの?!」

「確か、冬眠から中途半端に目覚めた熊は、腹が減ってかなり機嫌が悪いつて聞いた!!」  
「そんな情報どうでもいいから!」

早くアイツをどうにかしろ!!」

「ここは年上の兄ちゃんがどうにかするもんだろ!!」

「うるせえ!!テメエがどうにかしろ!!」

「無茶言うなよ?!人間が生身で勝てる訳無いだろ?!」

兄ちゃん元々体頑丈だろ?!」

スキルで身体能力上がってんだから、兄ちゃんの出番だろ!!」  
「熊と対等に渡り合える訳ねえだろ!!」

ーグマアアアアアア!!

「つーか熊の鳴き声ってこんなだったけか?!

「知んねーよんな事!!」

「て言うか武器?!何か武器無いの?!」

「そんな都合よくある訳…って?!前!前!!」

「ウソだろ?!」

その瞬間、さつきまでであった地面がなくなり、俺達の体は……宙を翔ていた。

「崖とかふざげんなあああああ!!」

——神は言っている……  
ここで死ぬ運命<sup>さだめ</sup>では無いと……

「いや〜…落ちる瞬間って、股間がフワツとして気持ちいいんだな」

「何だったら、こんどのコンテニユーは地上100000フィートの空中からにしてあげ  
ましようか?」

俺と攻也はゆりっぺの前で、頭にデカイたん瘤を抱えながら正座をしていた。  
ちなみに瘤の犯人はゆりっぺである。

「いや、仕方ないだろゆりっぺ。」

目の前崖で後ろは熊…そりや死ぬって」

「諦めが早すぎなのよ、アンタ達やる気あるわけ?」

「ゆりっぺがストリップでもしてくれば、多少は出るが」

ースパアンツ!

「だから冗談だよ」

「どうだか…」

俺は痛む頬を擦りながら、立ち上がる。

「さてと…じゃあコンテニューしますか」

「それより貴方達、そんな服装そうびで大丈夫なの？」

そういえば、元の世界では真夏日だった。

体を見渡せばカーキグリーンズのズボンにワインレッドのTシャツ、黒の七分袖シャツの薄着だった。

攻也にいたっては短パンにタンクトップ、上から半袖のシャツを羽織った、いかにも夏の格好だ。

よくこんなんでも雪山の中歩けたな、俺ら。

「そうだな…」

「んじゃ、ちよつと試すか」

《ドレスアップ…プリーズ》

全身が光に包まれ、気付くと俺達の服装が変わっていた。

「晴人をイメージしたんだが…

何か、いかにも中二って感じだな…」

俺の服装は黒みのあるジーンズに、さつきよりは少し明るい赤色のフードが付いたカーデイガンに、膝裏まである黒のロングコートの格好だった。

「なんか、デビル○イクライに居たな」

「確かに…

ほら、攻也も」

《ドレスアップ…プリーズ》

「こんな感じかな」

攻也は青のジーンズにシャツ、ファーが付いたジャケットの格好になった。



「じゃあコンテニューね、そこに立って頂戴」

「いや、またあんな猛獣や危険種のような化け物と遭遇したらまずい…ゆりっぺ」

「何よっ？」

俺と攻也は互いに頷き、ゆりっぺを見た。

「一番強い武器を頼む」

するとゆりっぺは見惚れる様な笑顔で俺達を見る。

少しドキツとした俺達の前で、ゆりっぺは自分の隣に腰くらいの高さの台を召喚すると、その台の上の赤いボタンに手を伸ばした。

「指輪とベルトやつたろうが!!」

さつきまでの笑顔がウソの様な、鬼も裸足で逃げ出す表情でボタンにゆりっぺが拳を

叩き落とす、するとさつきまであつた地面が姿を消した。

「でしたねええええええええ」

突然消えた地面から垂直落下する俺と攻也は、そう叫びながら奈落へと落ちた。

「……ん……んは……」

気が付けば、俺達はもといた雪山に立っていた。

「……さっきの雪山か？」

「また最初からかよ……」

「でもかなり歩いたし、最初からじゃないだろ」

愚痴る攻也に少し気楽に応え、俺は辺りを見回した。

「一体どこからコンテニユ……」

ーグルルルル…

聞き覚えのある唸り声に振り向けば、毛むくじやらかな生き物が、俺達を睨み付けていた…って?!

「熊こからかよおおお?!」

ーグマアアアアア

「ツ！攻也!!」

「応お！」

俺と攻也は左右に回避し、1つの指輪を取り出した。

《コネクト…プリーズ》

《コネクト…Go!》

「食らえ！」

俺はワイザーソードガン（以降ソードガン）をガンモードに変え、熊に向けて引き金を引いた。

撃ち出した数発の弾丸が命中し、熊は怯んだ。

「攻也！」

「任せろ！」

勢いよく飛び出した攻也は、熊にダイスサーベル（以降サーベル）による突きや斬撃でダメージを与えた。

「よっしゃ、止めだ！」

勢いをつけたサーベルが熊の脳天を貫くその瞬間、サーベルは“何か”によって遮られ、攻也は吹き飛ばされた。

「攻也っ?!」

「グホッ…何だ?」

俺と攻也は熊に視線を向け、絶句した。

熊の肩から、まるで人間の腕の様な物が「生えていた」。

するともう片方から同じように腕が生えだし、熊は後ろ足で立ち上がると、雄叫びと共にその体を「変化させた」。

「な、何だ?!」

「知るか!」

ーグルルルル…グルツ…グツ…グマアアアア!!

「何かヤバイぞ!」

ーグマアアアアアアアアア…

……マツスフオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

「……………?……………」

………ツハアアアアアアアアアア?!!」

奇妙な雄叫びと共に姿を変えた熊は、それはそれはたくましく、スタローンやシユワ  
ルツエネツガー顔負けのマツスルボディになりました。

ーマツスフオオオオオ!!

「いや意味わかんねえよ?!」

「心配すんな!俺もだ!」

突然の出来事に俺達は戸惑うも、熊?から距離を空け、ソードガンによる射撃でダメージを与えた。

ーマツスフオオオオオ!!

「って?!効いてない?!」

「兄ちゃん、俺に任せろ!」

《ドライブバー オン!》

「変く…身!!」

《セット!オープン!!》

「でいや!」

《L・I・O・N…ライオン!》

「へへん…んじゃ、ランチタイムだ!」



古の魔法使い、仮面ライダービーストに変身した攻也は熊つばい化け物…熊ツスルと命名しよう。

熊ツスル相手に攻撃を仕掛けた。

「こんにやろー！」

「俺もいくか…」

如何にも手こずっている攻也に加勢するため、俺はコネクトリングをドライバーオンリングに替え、ベルトにかざした。

《ドライバー オン……プリーズ》

起動音と共に本来の姿に戻ったウイザードドライバー。

その両サイドにあるレバーを操作し、中央のハンドオーサーを変身モードにする。

《シャバドウビタツチヘンション！

シャバドウビタツチヘンション！

シャバドウビタッチヘンシーン！》

左手の中指に赤い魔法石で作られた指輪、  
“フレイムウイザードリング”をはめ、指輪のバイザーを下ろす。

「変身！」

《フレイム…プリーズ》

ハンドオーサーにフレイムリングをかざし、左に腕を伸ばすと、リングから魔法陣が展開される。

《ヒー・ヒー・ヒーヒーヒー！》

魔法陣を抜けると、俺の姿が変わる。

現代の魔法使い、絶望を希望に変える最後の希望。

仮面ライダーウイザード フレイムスタイル

「ハアツ！」

変身を終えた俺は、熊ツスルに攻撃を仕掛ける。

だが熊ツスルの体は硬く、ソードガンの斬撃は弾かれる。

「いやに硬いなチクシヨウ…」

「パワーじゃ勝てねえか…だつたら！」

《Go! バツバ・バ・バ・バ・バツファ!》

《ランド…プリーズ

ド・ド・ド・ド・ド・ドン! ド・ド・ド・ド・ドン!》

攻也はバッファリングを取り出し、バッファマントを纏とい、俺はランドスタイルにスタイルチェンジする。

「だあ! オリヤー!」

「ハアツ! ツアツ!」

ーグマアアアツスフオオオオ!

劣勢を悟ったのか、熊ツスルは突然バックステップで距離をひらくと、咆哮と共にその背中から翼を生やし、空へと飛び上がった。

何でもありだな……

「ハア?!そんなのありか?!」

「攻也!ファルコン使え!」

「そうか!」

攻也はファルコンリングを取り出し、それをバックルに勢い良く差し込む。  
が……

《《バッド!》》

「あ?」

《《バッド!》》

「はあ?!バット?!」

俺が使いたいのはファルコンでコウモリじゃねえんだよ!!」

何故か発動しないファルコンリングにキレる攻也。

そうこうしている内にだんだんと熊ツスルとの距離が開かれていく。

「つち！」

飛ぶの速すぎだろ」

(ハリケーンスタイルじゃ追い付きそうに無いな…)

「こうなりや一か八か…」

俺はハリケーンドラゴンのリングを取りだし、ハンドオーサーを操作し、リングをかざした。

《エラー》

「っ！やっぱダメか」

「だあつくソっ！逃げんな昼飯〜!!」

「ああ〜…逃げられたか…」

飛び去っていく熊ツスルに対し、攻也がとんでもない台詞を言った気がしたが俺はスルーし、離れていく熊ツスルを眺めながら呟いた。

「くっそ、何でファルコンが使えなかったんだ?」

「知るか、魔力切れだろ?」

バカみたいに、コネクトでマヨネーズ出してたツケが回ったんだろ。

後、バットじゃ無くてバツドな」

互いに変身を解除し、さっきの戦闘について話す。

(そうだとしても妙だな…)

コネクトの消費魔力はたいした事無いと思うし、数回使うだけでこんなにも魔力を消費するか?)

俺は攻也を見て更に考えていると、1つの疑問が浮かぶ。

「…ん？」

攻也、体は何ともないのか？」

「何だよ、急に」

「いや、魔力を一定量摂取しないと不味いだろう？」

俺の言葉の意味を理解したのか、ビーストのデメリットを思いだし、攻也の表情がだんだんと青ざめていった。

「ヤツベエゾ?!」

「その言い方、全くそんな風に思えないが…」

慌てているのか分からない、すつとほけた声で叫ぶ攻也。

だが表情は青ざめ、変な汗までかきはじめた。

「ヤバイ?! キマイラに食い殺されるううううう……つて……あれ?」

「どうした?」

「なんともない……」

「……なあ攻也」

「ん?」

「キマイラと話せるか?」

「……?……やってみるわ」

そう言つて攻也はバツクルを小突く。

「おーい、キマイラー。」

「おーい……返事しろや居候!!」

ベルトのバツクルを激しく揺すりながら、怒鳴る弟の絵面つてかなりシユールな画だな……



「なあ兄ちゃん、これキマイラのヤツ入ってねえんじやねえの？」

(っ?!…まさか)

「攻也、俺の体人目につかないようにどつか隠しておいてくれ」

《コネクト…プリーズ》

「ハア？何言つて…ズカアーン！」

俺は攻也に後を頼み、取り出したソードガンをこめかみに当て、引き金を引いた。

# 疑問を解く!

「よっ」

「……………」

「無視すんなよ、ちよつと話したい事があつてさ。

来ちやった♪」

「……………来ちやったつて……………何当たり前の様に来てんの?!  
しかもそんな友達や恋人に会うみたいな軽いノリで?!」

「気にすんな、聞きたい事が2、3あるだけだ」

「気にするなじゃな……」

俺は手を前に出してゆりっぺの言葉を遮る。

「あれはどういうつもりだ？」

「話が見えないわね？」

「とぼけんな。」

何であんな不良品を俺達に渡した」

「不良品…」

失礼ね、あれは正真正銘本物のベルトと指輪よ？」

「だからだ」

「言ってる意味が分からないわね」

「本物だからこそ不良品なんだよ」

「と言うと？」

俺の言葉に対し、イタズラな笑みをするゆりっぺ。

「最初は魔力の消費が半端じゃないだけだと思ってたんだが……」

アイツに、魔力の切れた攻也にビーストのデメリットが発生しなかった。

最初は気付かなかったが、攻也のお陰で2つの可能成が上がった。

1つはそっちが気を利かせて、そのデメリットを無くしてくれた。

ただそんな事するなら、〃キマイラの呪いの無効化〃や〃無制限に魔法を使用できる  
つてチートの方が効率が良いだろ?〃

だが、それをしなかった。

もしくは、〃出来なかった〃する。

でもお前は紛いなりにも神様だろ?

ならその可能性は低い、となると必然的にもう1つの可能性が有力になる」

「回りくどいわね?」

弟くんみたいに直球できたら?」

「ならお言葉に甘えて。

つまりもう1つの可能性、問題はベルトだけじゃなく俺達にもある。

俺達はただのゲートで、体内にファントムを宿していない。

攻也のビーストドライバーにもキマイラは宿っていない。

だからアイツにビーストのデメリットが発生しなかった。

そして…」

俺はポケットからドラゴンスタイルのリングとサバトリングを取り出した。

「俺がドラゴンスタイルになれないのは、そもそもドラゴンを体内に宿していないから

：

じゃあどうする？簡単だ。

サバトでファントムを産み出せばいい。

そして、お前が言ってた俺達の最大の特長：

「絶望しづらい」。

魔法使いになるには、絶望を乗り越えてファントムを体内に抑え込む必要がある。なるほど、確かに絶望しづらい俺達には最適な装備だな」

俺の憶測に近い推理にゆりっぺはクスクスと笑い出す。

「御名答。

他に質問は？」

「この仮説が事実なら、何故アイツは変身出来た？」

キマイラが居ないなら変身すら出来ないんじゃないのか?」

「それはこっちで変身出来るようにしておいたの。」

まあそうしても、ゲートはもちろん、普通の魔法使いでも変身は出来ないのだけど。

それでもあの子が変身出来たのは、貴方達が異質だから。

そもそもゲートは、他の人間よりも魔力値が高いものを差すのは知ってるでしょ?」

ゆりつぺの問いかけに返事を返すと、続けて話し出した。

「簡単に言うと貴方達は、ゲートを人間に定めた場合のゲートに当たる。

貴方達は魔力値が高すぎるの、異常なまでにね。

とくに貴方は、異常の中の異質、規格外の化け物」

「ひでえ言いようだな」

「事実よ…貴方程じゃないけど、弟くんも相当なものよ?」

まあ、ああも簡単に変身されるとは思わなかったけど」

「実際どうなんだ?」

「魔力の消費ってのは」

「そうね…現状、貴方はだいたい変身維持は30分といった所かしら、弟くんは20分つ

て所ね。

変身中に他の魔法を併用するなら、さらに短縮されるわ。

弟くんも、1度の変身にマント1回が限度」

「俺はともかく、攻也はかなり厳しいな…」

そもそも、何でキマイラが居ないんだ？」

「エエっ?!」

いや、…あ、その…そう！

呪いの事もあるから、抜いておいたの！

いや、でもデメリットの方も大きいわね！

まああ?!それでも魔力不足で死ぬよりはましでしょうね！」

再び台を召喚するゆりっぺは、上に置かれたボタンに手を伸ばす。

「じゃあ、続き頑張ってね！」

ボタンが押され床が消える。

「ちよつと待てえええい!!」

「うわああ?!」

ギリギリで俺は消えていない床にすがり付き、一番知りたかつた事を尋ねる。

「最後の質問!あの世界には——は居るのか?」

「フフツ♪…居る……と言ったら?」

さっきまでの慌てた様子はなく、妖艶な笑み…その言葉をがピツタリな表情をするゆりっぺ。

ゆりっぺの言葉を、俺は鼻で笑い床から手を離れた。

そして……



「クソファ○キンだこのヤロー!!」

ゆりっぺに怒鳴りながら中指を立て、俺はあの世界にコンテニユーをした。

――

「……戻ってきたか……」

目を開けばいつもの雪景色。

ふと体を起こすと、なぜか俺は祭壇の様な物の上に居た。

「体隠しとけつつつたのに…あんバカは…」

愚弟のバカさ加減に愚痴つっていると…

「う〜でとう〜でを、 つ〜なぐ関節♪

ひ〜じ♪ひ〜じ♪

ひ〜じが無ければ、 う〜では回らぬ♪

ひ〜じ♪ひ〜じ♪

あゝ、ありがたやゝありがたやゝ♪」

妙な唄と妙な踊りをしているバカが、そこに居た。

(また変なキノコ食ったのか?)

「何やってんだ…お前…」

「ん? ああ、おかえり兄ちゃん。

何って、暇だったから邪教徒ごっこしてた」

(死体になってた俺を使って遊んでいたと…)

「……………ハア……………まあいいや。

攻也、話がある」

「?」

—————

「なるほど…つまりファルコンが使えなかったのは、ベルトの中は空き家だから。キマイラが居ないから、使えないと…」

で、1回の変身にマントは1枚しか使えない…つて！

厳し過ぎるだろ?!」

「そこでだ」

俺はポケットから1つの指輪を取り出した。

「これを使って人為的にサバトを起こして、絶望する。

そこで絶望を乗り越える事で、はれて魔法使いの一員って訳だ」

「面倒だなあ…」

つーか、何でゆりつぺは初めからキマイラ入りのベルトにしなかつたんだ？

いくら呪いの事があるつつつても、流石になあ…」

「だよな……」

そもそも、呪いの無効化の為にキマイラを抜き取るなら、魔力源が無くなる事を見越して魔法の無制限使用か、劇場版みたく、呪いを持たないタイプのキマイラにするのがベターだろうし……」

「それか……ゆりっぺがベルトに封印しようとした時に逃げられた、とか?」  
「流石にそれは……」

俺はふとキマイラの事を聞いた時のゆりっぺを思い出した。

(まさか……な?)

「取り合えず、使ってみるか……攻也手え出せ」

「は? 何で?」

男に、しかも自分の兄貴に指輪されるとか嫌なんだけど」

「俺だってやだよ。」

お前のベルトじゃこの指輪使えないだろ?」

「じゃあ自分でつけるよ」

渋々俺の手から指輪を受け取り、攻也は中指にはめた。

「やるぞ?」

《エラー》

「あれ?」

「変だな…」

攻也、リング貸せ」

攻也からリングを受け取った俺は、自分の中指にはめてバックルにかざした。

《エラー》

「おかしい…」

結構時間が経ったから、魔力はお互いに回復したと思っただがな…

「まあ良い…攻也、荒療治でいくぞ」

俺と攻也は近くの石と倒木に腰掛け、向かい合った。

「想像してみろ…」

お前の向かいから、超お前好みの美少女が歩いて来た」

「うんうん」

「するといきなり突風が！」

「おお!!…とつぷうってなに？」

「…いきなり来る強い風な」

「なるほど」

「その風で向かいの娘のスカートが捲れ上がった！」

「おおおお!!!」

「だがそのスカートはキュロットスカートで、中は見えませんでした」

「グアアアアアア！」

勢い良くひび割れていく攻也の体を見て、俺は苦笑いしか浮かべられなかった。

「すげえ勢いでいったな…軽く引くわ…」

てか、俺等の長所つて絶望しずらいだったよな…

まあ、後はこれに乗れれば…」

「に、…兄ちゃん…」

「どうした?」

「…ごめん…もう…無、理…」

「アカアアアアアアアン!」

俺はたまたま側に有った小さい岩で、攻也の頭を叩き割った。

するとひびの進行は、攻也の息と同時に止まり。

ひび痕は攻也の命の火と連動して消えていった。



「ただいま〜…」

「お、目が覚めたか」

「ああ。」

でもマジでゆりつぺのヤツ、限界来てたわ」

「だろうな…」

そろそろ真面目にいかうかなと思った瞬間、お互いの腹の虫が音をたてる。

「日も暮れてきたし、とりあえず腹ごしらえするか」

「ドーナツとマヨネーズだけだけどな」

「いいや。」

肉食うぞ」

俺は少し離れた場所を指差した。

そこにいる鹿は、こちらに気付いてないようだ。

「じいちゃんと狩りした時みたいに、スコープ付きのライフルじゃないが、ソードガンで弾道コントロール出来るから、多少外しても何とかなるさ」  
「おお！頼むぜ兄ちゃん」

ゆつくりと近づき、ソードガンを構える。

息を止め、気配を消す。

昔の感覚を思い出しながら、引き金に指をかける。

ゆつくりと、静かに息を吸い、静かに吐き出し、獲物を見据える。

(殺気は出すな…一発勝負だ)

しばらくすると、鹿が視線を移しだした。

(今d…「マデヤゴラアアア!!」っ?!)

突然の怒号に俺と鹿は驚き、ビクついた。

驚いた拍子に引き金を引いてしまい、弾は鹿の真横をかすめ、背後の木に当たった。怒号からの発砲音。

当然、鹿はそこから逃げていた。

「ああ…俺の鹿肉が…」  
ステーキ

「攻也、それ一応死亡フラグな」

俺はため息と共に鹿を諦め、怒号の発声元を探した。

「おい兄ちゃん、あれ」

「ん?」

攻也が指差した先には、10人以上の山賊っぽいオッサンに追いかけて回されている、若い3人の男女だった。

その山賊が声の主だと理解すると、俺はソードガンを肩に担ぐように置き、首をならす。

攻也はサーベルを取りだし、サイコパスな殺人鬼の様にサーベルの刃を舐め、黒い笑

みで山賊を見据える。

「攻也……狩りの続きだ。」

獲物は俺達の飯を台無しにした、あの山賊共だ」

「へへへへ……」

「行くぞおおお!!」

「ゴートウーザ、ヘエールウ!!」

俺達はどす黒い感情と本能の赴くまま、走り出した。

## 物語に出合う！

とある雪山。

そこには武装した十数人の山賊と、それに追われる3人の若者が、命懸けのマラソンをしていた。

「マデヤゴラアアアア！」

「待てって言われて待つヤツがいるかー！」

「どうするのよイエヤス！」

「アンタが変なちよっかい出すから！」

「俺のせいだよ?！」

「そんなの無理に決まってるだろ！」

「サヨがどうにかしろよ！」

「そのそこそこに立派なの胸とか使えば何とかかなんだろ?!」

「こんな時にセクハラ?!」

信じらんない!

しかもあんなのに色仕掛けなんかしたら、即行で犯されるわよ!!

あんな連中が初めてとか絶体にイヤー!!

「2人共!無駄口叩いてないで走れー!」

「もう走って(んよ)るわよ!!」

口喧嘩をしながら走る3人の前に、倒木に腰かけた男と、木にもたれ掛かる様に立つ男が現れた。

「おい!アンタ等逃げろ!!」

山賊が沢山来てる、殺されるぞ!!」

「危険く…まあ、そうかもな…」

「「っ?!」」

先頭を走る茶髪の少年が必死に叫び警告するが、2人の男の発する殺気に3人は驚いた。

「行くぞ攻也!!」

山賊狩りじやああああ!!!」

「ゴオオオオオオトウウウウザ…

へエエエエエルウツ!!!」

その男達は狂っていた。

黒い髪の男は身に纏うコートを靡かせながら、手にした銀色の剣で山賊達を風ぎ払い、投げ飛ばし、蹴り上げ、変則的な動きで容赦の無い連撃を叩き込む。

茶髪の青年は相手の攻撃をかわしながら、マウントをとっての顔面殴打、足だけで木を駆け登ってはデタラメな動きと細剣による攻撃で、山賊達を圧倒していた。

「お前等のせいで鹿を仕留め損ねたじゃねえか!!」

「俺等のメシを台無しにしやがって!!ゆるぎん!!」

「た、助け…「オオラアツ!」グフアツ!」

「ちよつ待つ…「ダアラツシャア!」ヘグツ!」

「へっ!貰つ…「速さが足りない!」コパツ!」

「隙あ…「ところがギツチョン!」アベシツ!」

ちぎつては殴り、ちぎつては蹴り、ちぎつては投げる。

それはまるで、地獄の光景であった。

「テメエ等の血は何色だあああ!」

「その程度か三下ああああ!!」



「た、助けてくれえええええ！」

「イヤだあああ！母あちやあああん！」

「さあ泣き叫べ！判決の時間だ！」

「[[イギヤアアアア!!]]」

絶対的なまでの暴力。

自分達を殺そうとしていた相手であるにも関わらず、山賊達に同情や哀れみなどが込められて来るその光景にただ、少年達は立ち尽くす。

少年は忘れないだろう：

いや、忘れないだろう。

この光景を、この惨状を…

そして…

自分達の絶体絶命な状況を打破し、命を救ってくれた人物の姿を…

「WRYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY!!」

倒した山賊の頭を踏みにじり、D I O バウアーをしながら奇声を発している、2人の  
命の悪人  
狂人を……

「本当にすいませんっしたー!!」

「[[[っしたー!!!]]」

「うん、許さん」

《バインド…プリーズ》

「[[[ギャー!!]]」

「「うわあ……」」

山賊狩りから数十分。

黒のコートを纏う男、ソウタの前にはズタボロの山賊達が土下座をしていた。山賊達の謝罪は虚しくも相手に届かず、鬼畜な魔法使いは山賊を縛り上げた。

「えと……さつきはありがとう。」

俺はタツミ、こつちがイエヤスで、こつちがサヨ」

鬼畜な魔法使い、ソウタに近づき礼と自己紹介をするタツミ。

それを見たソウタは、やっぱかと小声で呟いた。

仮面<sup>魔法使</sup>ライダーの力に関しては、帝具の一種とすること。

そして、自身達が転生者であることが誰にもバレないようにと、コウヤとすでに話し合っている。

後は自然体で振る舞えばいい、ソウタはコウヤにアイコンタクトをとった。するとコウヤも気付いたのか、頷き返した。

「チャパツにハチマキとオツパイだな、覚えた」

「何を覚えた?!」

「気にすんな、コイツなりの挨拶だ。」

「たしか……タツチミーにイエモトと処女だったな」

「「アンタもか!!」」

「はははっ……わりー、わりー。」

でも緊張はとけたろ?

ついでに警戒心もといってくれると助かるんだが」

「「……………」」

笑顔で語りかけるソウタの言葉に、サヨとイエヤスは眉をひそめ、タツミが唾然とした表情で冷や汗を流す。

「な、何でそう思うんだよ?」

「助けて貰ったんだから、礼ぐらいしないと」

「だってその嬢ちゃんは、腰に隠してある短剣かナイフを何時でも抜けるように、腕の位置を変えただろ?」

メインは弓みたいだが、この近距離じゃ弓なんて射れないからな。仮に距離の問題が解決しても、弓を構え矢をかけるまでの時間が命取りになる、的確な判断だな。

ハチマキはずっとこのバカを注視してるしながら、いつでも攻撃や防御が出来るように足や腕を動かしている。

そしてお前さんは、会話をしながらも俺の動きを見ている。

視線が俺の手や足、側にあるソードガン獲物に向いていたぜ？

何より、何時でも距離を空けられるよう足に力が入っている。

何せ下は雪だ、その程度足の沈み具合を見れば分かる。

そりゃ警戒するわな？

見ず知らずの他人が、自分達を無償で助ける訳があるのか、もしかしたらコイツ等はさつきとは違う山賊じゃないのか…とか、まあ色々考えればな」

「「……………」」

ソウタの言葉に全員が固まる。

自分達の行動と考えを完全に読まれ、再び啞然とするタツミ達。

そして、ヤッチまったとにこやかな笑顔で内心焦るソウタ。

そんな中、コウヤは笑いながらタツミの肩に手を置いて話し出した。

「気持ち悪いだろ？」

兄ちゃんの特技なんだよ、勘弁な？

後俺はコウヤでいいわ。

年も近そうだし、仲良くしようぜ」

良くやった、心の中でソウタはコウヤを誉め、安堵した。

「あっそうだ！

タツミって事は、お前らこれから帝都に行くんだろ？

俺達も連れ……ズカーンッ！痛いっだあい目があああ?!」

誉めた自分がバカだった。

そう言わんばかりにソウタは頭を抑え、ソードガンでコウヤの目を撃ち出した。  
(見ず知らずの他人が自分達の目的知ってたら、余計に警戒されるだろが)

心の中ぼやきながらソウタはソードガンをしまい、タツミ達の方に向き直った。

「いや、すまん。

実は俺達帝都に向かっていたんだが、辺境の地から来たもので迷っていたんだよ。

アンタ等もその装備からして山越えだろ？

もし帝都に向かってるなら、帝都までの同行か、道のりを教えて貰えれば助かるんだが…」

「いや、それはいいんだが…」

そう言つてタツミは心配そうに横に目をやる。

「ぬおおあああああああ!!

目が…目があああああああ!!」

「アンタの連れ大丈夫か？」

左目を両手で抑えながら、雪の上を左右行ったり来たりと転がるコウヤを見ながら、イエヤスはソウタに尋ねた。



「大丈夫大丈夫、魔力コントロールで弾をコルクに換えてあるから」  
「まりよ……く？」

さぞどうでもいいかのように右手を左右に振り、答えるソウタ。  
一方タツミ達は聞きなれない単語に首を傾げた。

「……………ツ……………」

大丈夫なわけねえだろが?!

亜音速で飛んでくるコルクが眼球に直撃したんだぞ?!

俺じゃなきや失明してんぞ!!」

（（いや、何で平気なんだよ……）（））

左目を抑えながら起き上がり、涙目で訴いかけるコウヤ。

タツミ達の内心とは裏腹に、ソウタはソードガンをしまいながら言葉を返した。

「大丈夫だって、最悪失明したら俺が直すから」

「治すの字が違うだろ絶体?!」

「どうでもいいだろ。」

そんな事より、お前はあのオツ山賊から使えそうな装備品、あと食い物と金銭全部取ってこい。

終わったたら、そのまま逆さ吊りにして火に掛けるか、身ぐるみ剥いで真っ裸にして木に縛りつけるから」

バインドの魔法で縛り上げている山賊達を指差しながら、ソウタはやる気無さげな疲れた声で告げる。

「くく……ちえつ、わあつたよ……」

（（山賊よりひでえ?!））

頭をかきむしりながら、しぶしぶ了承するコウヤ。

そんな2人の行動に3人は驚いた。

「別にそこまでしなくても……」

「何言ってやがる。」

拘束が解けたら、また襲いに来るかもしれないだろが。

それに、剥ぎ取りは狩りやRPGの鉄則だ」

「アール…ピー…?」

「で、どうだ？」

俺達の同行、頼んでもいいか？」

「あ、ああ…」

アンタ等かなり腕がたつみたいだし、むしろこつちから頼みたいくらいだ」

「OK、交渉成立だな。」

遅れて悪い、俺はソウタだ。

さつき自分で名乗ったが、あれが弟のコウヤ」

「ああ、よろしく頼む」

「こつちこそ、あと…「兄ちゃん?!コイツら干し肉持つてるぞ!!」っ?!」

何だとおお?!神かああああ!!」

コウヤの声に食いつくソウタは、タツミとの握手を解き、勢い良く山賊の方に走り出した。

破天荒かつ奇想天外な彼等の行動に、タツミは呆気にと取られていた。

「ちよつとタツミ?」

ホントにあの人達と一緒に帝都に向かうの?」

「まあ、その方がいいだろ?」

実際ソウタさんもだけど、コウヤもかなりのもんだしさ」

「確かに…そうだけど…」

「どうしたサヨ、嫌なのか?」

「嫌とかじゃなく…」

「何だよサヨ?」

もしかして…どっちかに惚れたとか?」

「はあ?何言ってるの?」

あんまりぶざけてると、キ〇玉引っこ抜くわよ」

「怖えよ?!」

ゴミを見るような冷ややかな目でイエヤスとタツミを睨むサヨ、すると山賊達が拘束されている方から情けないオッサンの声がタツミ達の耳に入った。

「た、…頼む！」

命だけは…命だけは助けてくれ！」

「あ？誰もお前らを殺すとは言つてないだろが。

火に掛けるか、真っ裸で木に縛りつけるだけだ。

…まあ、その後は放置して俺達は山を下りるが」

「それつて見殺しじゃね？」

「見捨てるだけだ」

「[[どつちにしろ死ぬよ!!]]」

無情にして非情、ソウタの容赦ない鉄槌に山賊達の中には泣き出しそうな者まで現れた。

「じゃあ、どうされたいんだよ？」

拘束解いて下さいは無しな。

解いたらお前ら、俺達を殺してその女の服引ん剥いて、コイツの手や足や胸、サラサラの髪使つての○○○とか、口にナニぶち込んでイ☆☆☆☆やらさせて四方八方から  
 テメエ等のチ◇◇で責めまくってレ××するつもりだろが。

そんなでもって全身開発、チ△△無しじゃ生きていけないのって体にしてテメエ等の肉\*\*にするんだろが、羨まけしからん」

「ちよつと!?!」

ソウタの放送禁止用語もとい淫語のオンパレードに、サヨは顔を赤くして胸を隠すようにして後ろに下がった。

「い、いや…そんな事はしねえ。

それに俺達…女には興味ねえから…」

「[[[[…ウエ?]]]]」

山賊の1人が放った一言が、男4人の思考を停止させる。

「俺達は、女房や恋人、婚約者とか家族に捨てられたごろつきのあつまりなんでさあ」  
「みんな何かしろ、女に見限られた事で心に傷を負ってんだ。」

「つまり何が言いたいかってえと…」

「[[[[女なんて、クソくらえってんだ!!]]]]」

怒気と覇気のコもった魂の叫び、山賊達の性癖を知ったソウタは、冷や汗を流しながらタツミ達を指差す。

「……つまりコイツらを襲ったのは……」

「その茶髪の兄ちゃん、結構可愛い顔してるだろ？」

「それでな……溜まってたもんが爆発しちまったわけさ」

「俺は黒髪の方かな？」

「てか、兄ちゃん達もいい感じじゃねえか。」

「そこそこにイケメンで強いなんて……キライじゃねえぜ？」

キラんと聞こえて来そうなキメ顔をする山賊。

ソウタは少し目を細め、無言でポケットから一つの指輪を取り出し山賊達から距離をとる。

それを見たコウヤの表情は焦りに染まり、ソウタの元に駆け出した。

「兄ちゃん待って！早まるな！」

《エクスポーション…プリーズ》

「消え去れええええええ!!」

「[[ぎやああああああ!!]]」

爆音と爆炎が山賊達をつつみ、吹き飛ばす。

その光景に驚くタツミ達3人とは別に、コウヤはヤつちまったよと力の抜けた声で眩  
き、肩を落とした。

「ハア…ハア…ツツ、嫌なもん思い出させやがって」

「ど…どうしたんだ? ソウタさんは…」

ソウタの奇行に戸惑うタツミは、事態の真相を知るのであろうコウヤに尋ねた。

な

「あく…いや、兄ちゃん昔のバイト先で、ガチムチのオネエに襲われそうになった事があつてだな…」

「マジかよ…」



ソウタの過去のトラウマを知ったタツミ達、するとドサリと鈍い音が響き、音のした方に全員が目を向けた。

そこで目にしたのは、雪の上につつ伏せになって倒れているソウタだった。

「オイ?!ソウタさん!ソウタさん!!」

「心配するな……ただの魔力切れだ……」

驚きの余りに叫ぶタツミ、サヨとイエヤスは心配そうにソウタを見るが、ソウタは少し気だるさを含んだ声色で肘をついて腕を左右にぶらぶらと振る。

「エクスプロージョンで魔力切れって、どこの頭のおかしい紅魔だよ」

「うるせえな……」

あ” あく……だりい……

…雪冷てえく……?……?……」

コウヤの言葉に面倒くさそうに返すソウタ。

埋もれた顔を横にした瞬間何かを感じたのか、表情を変え芋虫の様な動きでコウヤに

近づき、その足にガッチリとしがみついた。

その様子に首を傾げるコウヤだが、次第に事態を把握したのか冷めた目をする。

「ねえ？」

「何か聞こえない？」

2人とは別に、いち早く異変に気付いたのはサヨだった。

「確かに……何だ？」

「ゴゴゴ……って、何の音だ？」

事態の深刻さを理解出来ずにいるタツミとイエヤス。

サヨは察したのか、事の原因であるソウタにジト目をむけた。

「オイ愚兄」

「何だ愚弟」

「離せよ、逃げられないだろが」

「なら俺を担いで、動けないんだよ」

サヨの視線に気付かず、コントのような事をするソウタとコウヤ。

次第に近づき大きくなる音にイエヤスとタツミは焦りを見せはじめた。

「何だよこの音?!」

不安からか叫ぶタツミ、それを見たコウヤは頭をかきむしりながらタツミ達をみる。

「ああ〜…」

「雪崩だ」

コウヤの言った言葉を理解していないのか、理解したくないのか、タツミとイエヤスは呆けた顔で首を傾げ、サヨはひきつった笑みを浮かべ、涙目でやっぱりと呟く。

ほらとコウヤが指差す先に目を向けると、白い煙を上げながら雪が流れている様子が3人の目に入った。

「「イヤアアアアアアアアア?!!」」

迫り来る雪の波、それから逃げるようにタツミ達は全力で山を走り下りる。

後を追おうと走り出すコウヤ、だが足にしがみつくとソウタがそれを良しとしなかった。

「H A ☆ N A ☆ S E !」

逃げられないだろが!!」

「離すか! 動けないつったろ!」

「お前兄を見捨てるのか?! 家族だろが!!」

「雪崩起こした張本人が何言ってるんだ?!」

「こうなれば只では死なん!!」

「貴様も道ずれにしてやるううう!!」

急いでこの場を離れねば。

コウヤが走りだそうとするとソウタはそれを阻止、互いにその場から動けずにいた。

「があく、離せく…っ!」

あ!ミニ丈和服の雪女!」

「何だとお?!どこだ?!」

コウヤの言葉に過剰反応し、動かない体にムチを打ちながらコウヤの指差す方角に目を向けるソウタ。

するとコウヤはしめたと言わんばかりの表情で拳を握り、

「そこだああああ!!」

「グハツ?!」

ソウタの顎にアッパーカットを打ち込み、殴り飛ばした。

「あくばよ♪とつつあくん♪」

「オノオオオオオレエエエエ!」

笑いながら走り去るコウヤ。

ソウタはただ、悔しそうに叫んだ。

「オイイイイイ?!」

ソウタさん置いてきちまったぞ?!」

一部始終を見ていたのか、タツミは合流してきたコウヤに勢いのあるツツコミを入れた。

「ハッ！心配すんなヤマギ！「タツミだっつの!!」

兄ちゃんはな、タフでエロくてドスケベで、運の悪い残念系の二枚目半。

悪知恵やブラフで人を騙すのが得意な詐欺師野郎！

そして何より人畜有害!

Sが引くほど鬼畜で、Mが裸足で逃げ出す様な変態だ!

あの程度じゃ死なねえから大丈夫だよ!

……多分……

「タフ以外の大丈夫要素どこだ?!

って多分つつた?!多分って言ったよな?!

少し視線をそらし小声で呟いたコウヤだが、タツミにはしっかりと聞こえていた。

「イイヤツホオウ!!」

全員が死力で駆け下りていると背後から奇妙の叫び声が響き渡り、タツミ達はその発生源を探した。

「オイ?!アレ!!」

「何か来たあああ?!」



雪煙を上げながら近付く影。

煙が薄れ、影がハッキリと姿を見せる。

「ソウタさん!!……つて……」

「何ソレエエエエ?!」

現れたのは、ふんどし一枚の巨漢をスノボよろしくの如く乗りこなすソウタだった。山賊を器用に乗りこなしながらタツミ達の側によると、タツミ達の速度に合わせ並走した。

「いや、レ○ダブルつてすげえな。

翼を授けるだけあるわ、1缶で魔力全回だ」

「何でレツ○ブルがあんだよ?!」

驚くコウヤの肩に手を回し顔を近付けたソウタは、タツミ達に聞こえないように話した。

「ゆりっぺに頼んで、コネクトで欲しいものが何でも取り出せるに変えて来た。

お前のも同じじ使用に出来たんだが、やらない方が面白いと思ったからお前はそのままのマヨネーズ地獄だ、感謝しな」

「マジで?! 流石だぜ変態!! 啄むぞ」

走りながらコウヤは、ソウタの胸ぐらを掴んだ。

「ハッ！ それほどでもねえよロリコン！

離せ擦り潰すぞ」

負けじとソウタも胸ぐらを掴み返す。

片方は走りながら、もう片方はふんどし1枚の筋肉モリモリマツチヨマンのおっさんの上に乗って滑る男2人が、互いの胸ぐらを掴み頭突きした状態で山を下るシユールな光景が、そこにはあった。

「あんなあ。

ペド判定食らうのは精神医学上13才以下を性愛対象に見た時、または13才以下と

セツ○○した場合だ。

ロリコンはテメエだろがエロペドリスト」

「俺は守備範囲が広いだけのフェミニストだ。」

第一そんな幼女や女兒には手え出さねえよ、テメエと一緒にすんなマヨネーズ」

「んだとオツパイ性人が、マヨネーズバカにすんなよコラ」

「心配すんな。」

バカにしたのはマヨネーズではなくお前だ、脚フェチ」

「脚フェチの何が悪いだよ！

テメエだってオツパイばっかだろ！」

「脚よりは健全だろが！」

男つてのは1周回つて最後にはオツパイに還るんだよ！

だいたい脚なんて男にだってあるだろが！

そこに執着する意味が分からねえよ！」

「テメツ！今全国の脚フェチ全員敵にしたからな！」

「だったら何だ！やるか！」

「上等だ、かかってこいや！」

「童貞!!」

互いに罵り合う2人は、最後の一言をきに下を向いてため息をつき、どんよりとした葬式の様な重い雰囲気醸し出した。

「ふざけてる場合じゃないでしょおがああああ!」

そんな2人の行動に痺れを切らしたサヨは、ツツコミを入れた。

「あ、そうだった。

みんな乗れ!」

「乗れるか!!」

ていうか、その人さっきの山賊でしょ?!

何があつたらそうなるのよ?!」

「ん?」

コイツにこの危機を乗り越えたら、俺以外の誰かと一発やらせてやるって契約した」

「コイツ俺等を売りやがった?!」

さも当たり前のように答えたソウタに、イエヤスは驚きを隠せずに叫んだ。

「流石だぜ兄ちゃんゲス野郎！殺して良いか？」

「え？やだよ」

「素で返した?！」

「つてか、そんなのサヨが一番ヤバイだろ?！」

キョトンとした表情で返すソウタに、今度はタツミがツツコミを入れる。するとガハハハと笑いながら、山賊はタツミに話しかけた。

「心配すんな坊っちゃん。

俺等女には興味ないって言っただろ？」

「だから嬢ちゃんは安全だ、手は出さないさ」

「だそうだ、良かったなサヨ」

「それ女として複雑なんですけどお?！」

「つーかそれ！違う意味でもヤバイじゃねえか?！」

ソウタのめちやくちやな行動に嘆き、ツツコミを入れるサヨとイエヤス。  
コウヤは笑いながら、タツミの肩を叩いた。

「言つたら?うちの兄ちゃん人畜有害だつて」

「人畜有害とかそんなレベルじゃねえ!」

「よく考えろ山口!!」「タツミだ!!」

今この状況を乗り越えなければ、全員死ぬぞ!

テメエ等の尻と皆の命、どっちが大事だ!!」

「人の事を売つといて、何正論っぽい事吐いてんだアンタは?!」

「タツミ君、最初は怖いかも知れないが…」

大丈夫だ、ちゃんと優し…フツゴア?!」

「変態ボードが喋んな!」

そう言つてソウタは山賊の頭を足で踏み、雪に埋めた。

「早くしろ!時間が無いぞ!」

「そんなオツサンに全員乗るわけ無いだろ!」

「確かに…」

サヨ、お前恋人とかいるのか？」

ソウタの突然の質問にサヨは、顔を真っ赤にした。

「なっ?!」

何で今そんなこと聞くのよ?!」

「いいから!」

いるのか?! いないのか?!」

「…~~~~…いないわよ! 悪かったわね?!」

ソウタの迫力に圧されたサヨは、悔しそうに目に涙を浮かべ叫んだ。

「あつそ!」

じゃあちよつと失礼!」

《エクステンド…プリーズ》

「えっ?!」

ちよっ…きやあっ?!」

エクステンドで腕を伸ばしたソウタは、サヨの体に腕を巻き付け引き寄せた後、サヨをお姫様抱っこで抱き抱える。

「これなら一人分何とかなっただろ」

「ええい、こうなりや自棄だ!」

「覚えてろよテメエ!」

タツミ、イエヤスと順に山賊の上に飛び乗る。

「ようし、後は俺…」ただしコウヤ、お前はダメだ」

「…てめっ!…さては置いてったの根に持ってんな?!」

「フハハハアア!」

自力で逃げるんだなあ!」

「さ…せ…るかああ!」

「ヒャンツ?!」



勢い良く飛び付いたコウヤは、山賊のふんどしを掴んだ。

「なんじゃとてえええ?!」

「スピードが、落ちてる?!」

コウヤの行動に驚き、妙な叫び声を上げるソウタ。

そして山賊の速度が変化した事に、サヨも驚きの声を上げる。

「ヘッ!人間ボードの使い方なら、俺も知ってただよ!」

「Oh…」

勢い良くふんどしを引っ張ると、山賊の声と共にスピードが落ちる。

「ふんどしブレーキ離せこのバカ!」

「離すか!」

「俺も乗せやがれえええ」

「ブレーキが折れるだろが！」

「ちよつ2人共!!後ろ!後ろ!!

雪がああああああ!!」

サヨの絶叫と共に迫る雪。

するとコウヤは何かに気付いたのか、あつと眩いた。

「兄ちゃん」

「何だ?!」

「…飛べば良かったんじゃないかね？」

右手にはめたファルコンのリング。

コウヤがそれをソウタに見せると、ソウタは先程までの焦りを忘れたかのような穏やかな笑みを浮かべた。

「テレポートって手もあったな…」

時すでに遅し、雪の波は5人の真後ろに迫っていた。

「ギイアアアアア!!」

「ウワアアアアア(OMO;)!!」

「イヤアアアアア!!」

ソウタ達の向かいの山の山頂。

そこにある人影は、ジツとソウタ達を見つめる。

白いローブを纏ったその人物は、雪崩にのまれるソウタ達を見届けた後、腰に巻かれたバツクルに指輪をかざした。

《テレポート…ナウ》

展開された魔方陣をくぐり姿を消した人物は、まるで魔法使いの様だった。

魔法使い

残り？人

フラグが建つ!

「……………ここは…?」

サヨは目を覚ますと、辺りを見回した。

「そうだ、私達雪崩に…」

タツミやイエヤスは?

道中出会ったあの2人は?みんなは無事なのか?

心配にくれるサヨは、重く気怠い体を起こそうとした。

すると腰に何かが当たっている、否、乗っている感触を感じたサヨは、後ろを向き絶句した。

そこには大木が。

その間には自分を庇ったかのように木に倒れかかるソウタの姿があった。

「ちよつと?!」

ねえ?!大丈夫なの?!…っ?!」

ソウタを起こそうと体を揺するサヨ。

その時、ソウタの額から血が流れ出した。

「どごうしよう…」

ソウタの額に応急措置として、自身の腰に巻いていた帯を巻き付け止血したサヨは、辺りを再び見回した。

「……!」

あそこなら」

目に入ったのは小さな洞窟だった。

ソウタを抱えながら洞窟に入るサヨは、すぐに辺りの物をかき集め、火を起こした。

「よし…後は…」

ソウタに視線を移したサヨは、再び驚いた。

その唇は紫に、体も僅かに震えていた。

頭部の出血に雪で濡れた服が、彼の体温を奪っていく。

このままでは凍死しかねない、急いでサヨはソウタの体を火の側に移動させた。

「仕方ないわよね、助けて貰ったわけだし…」

サヨは自身の荷物から厚めの布を取り出した。

幸いにも布は濡れておらず、サヨはそれを側に置くと、おもむろに濡れた服を脱ぎ出した。

「さ、さすがに…下はいいわよね…」

下着姿になったサヨは恥ずかしそうに眩き、ソウタの服に手をかけた。

ソウタの服を脱がし終えたサヨは、側に置いた布を羽織りソウタに寄り添う。

恥ずかしさから体温が上がり、鼓動が速まるのを感じながらサヨはソウタに体を密着



させようとした。

瞬間…

「……寒つ?!…え?…何で俺裸?」

「……………え?……………」

「……は?…サヨ…?」

何でお前も裸なの…まさか…」

「…夜這い?」

パチンと大きな濁いた音が、洞窟に響き渡った。

—————

「ホントごめん！」

マジでごめん！

本当に悪かったごめんなさい！」

「……………」

焚き火を挟むように向かい合って座るサヨと、現在進行形でパンツ1枚姿で土下座を

するソウタ。

ソウタの謝罪はサヨには届かず、そっぽを向かれていた。

「いや、ホントマジで許して…」

「……………たの？…」

「…え？」

「……………見たの？…」

「あゝ……………はい…」

「…ずいぶんと正直に答えたわね」

「いや、あんな正面から来られた上に何で裸なのとか言っちゃてるしな…」

弁解のしようがない」

「ふくん…」

後、夜這いとかじゃないから」

「ああ、俺を助けようとしたんだろ？」

ありがとう」

「べっ…別にたいしたことは…クチュンッ！」

素直な感謝が照れ臭かったのか、視線をそらしながら返答したサヨは、小さくしゃみをした。

くしゃみを聞いたソウタはクスリと笑いコネクトの指輪をはめ、側に干してあるズボンを穿き、指輪をバツクルにかざした。

《コネクト…プリーズ》

「使えよ、その布だと風邪ひいちまいぞ?」

「あ…ありがとうございます…」

魔方陣から毛布を取り出したソウタは、サヨに毛布を手渡した後、同じ物を取り出して羽織った。

「後は…ほれ。」

「飲めよ、温まる」

そう言つてソウタは再び魔方陣から湯気の立ったマグカップを取り出し、サヨに手渡した。

サヨはありがとうと受け取り、渡されたカップに息を吹きかけ口にした。

「甘くて美味しい…何コレ?!」

「ん？」

ああ、ココアだが…知らないのか？」

「し、知らないわよ！悪かったわね！」

少し頬を膨らませながらサヨはソウタを睨んだが、再びココアを口にして表情を和らげる。

「……ねえ」

「ん？」

「気になったのだけど、その能力なんなの？」

色んな物を取り出しり、腕が伸びたり、何も無いところから鎖生やしたり…

貴方ホントに人間？」

「失礼だな、魔法だよ」

「魔法…？」

ソウタは頷き、冷ましたココアを口した。

「俺は魔法使いなんだよ」

「うそ…」

驚いた表情で固まるサヨに、ソウタはホントだと告げ再びココアを飲む。すると固まっていたサヨが口を開いた。

「とても30才以上に見えないわ…」

「おいサヨテメエ何だった?!

そっちの魔法使いじゃねえよ!

俺はまだ20代だ! 執行猶予はまだ7年ちよつとはあるんだよ!

何だったら、今すぐテメエ襲ってそっちへのジョブチェンジ権破棄してやろうか?!

あ”あ?!”

「ゴメンゴメン!!」

冗談だから! 本気にしないで!」

好きで童貞でいるわけじゃねえんだよと、必死に謝るサヨをよそにソウタは、ぶつぶつとぼやきながら腰をおろした。

「てか、女の子本人を目の前にしてレイプ宣告って…

他にはどんなのがあるの？」

「他？……う〜ん…

デカくなったり、小さくなったり…臭くなったり、光ったり…ムキムキになったり…  
……とか？」

「何それ……使えるの？」

「まあ…使い方次第だよ。

後このコネクトの魔法はもう1つ能力がある」

「もう1つ？」

「そ」

《コネクト…プリーズ》

そう言ってソウタは再びバックルにリングをかざし、展開された魔法陣に腕を入れ

た。

その様子をまじまじと見ていたサヨの肩に、トントンとつかれた様な音と感触が伝わる。

不思議に思ったサヨが振り返るとそこには洞窟の壁、そこから生えてきたかのように存在する腕が、サヨの目に写った。

「ヒギヤアアアアアアア?!

手が! 手が! 手えええええええ! 「ふざっ?!」

イヤアアアアア! キモイキモイキモイキモイ!

驚きの余りに羽織っていた毛布を放り投げ、タツクルをかけるかの様な突進でソウタに抱き付くサヨは。パニツク状態で、目には涙を浮かべていた。

「苦しーちよっ!

サヨ落ち着け、俺の手! 俺の手だから!

「…スン…ええ?」



ソウタの言葉で我に返ったサヨは背後を見る。  
そこには指輪をはめた右腕がピースをしていた。

「な？」

「何だ……びつくりしたあゝ……」

「……………」

安堵した2人はため息と同時に下を向く。

そして今の自分達の姿に絶句した。

上半身裸の男に抱き付くパンツ一枚の女。

瞬間、サヨの腕は大きく振り上げられ銀色の閃光がソウタを襲った。

文字通り眼前。

ソウタの目から数センチの距離に、どこから取り出したのかサヨの右手に握られたダガーが迫っていた。

「ちよつと待て！」

「今のは俺悪くねえだろ?!」

「アンタが魔法なんか使うからよ！」

「お前が聞いてきたんだろが！」

「やり方ってのがあるでしょう…が!!」

「アザデイスタンツ?!」

白羽取りでナイフを止めたソウタに、サヨは頭突きを入れてソウタを倒した。

「服も乾いてきたし、そろそろ行くか」

「そうね」

ソウタがコートを触りながら話すと、サヨは賛同して立ち上がりソウタを睨んだ。

「何だよ？」

「あっち！向いててくれる？」

「ハイハイ……分かりましたよ……」

つたく、2回も間近で裸見たんだから別に今更気にしなくても……」

ビシツと外を指差すサヨ。

ソウタはぶつぶつとため息をつきながら返事を返し、乾いた服を着るとサヨに背を向けて座り込んだ。

「じゃあ俺は暇だし武器の手入れでもしようかな……」

（何てな小娘！

この俺がすんなりと引くわけないだろが！）

そう言つてソウタはコネクでソードガンと布を取りだし、鼻歌混じりに手入れを  
だした。

ソードガンを磨いたソウタは、その剣を色んな角度から見る、銀色のその剣はまるで鏡のようにソウタを写す。

ソレを見たソウタはゲスな笑みを浮かべ、ソードガンを傾けた。

(ソードガンの角度を調整すれば♪)

美少女の生着替えを♪

覗くことが出来る気がする♪)

ソードガンの表面を、鏡のように利用しながらソウタは覗きをはじめ。

しかし、ソードガンに写ったサヨの姿は弓を構えており、鬼の形相で今にも矢を放つ勢いだっただ。

「……………、こんなもんでいいかな…武器の手入れ…」

そう言ってソウタはソードガンを仕舞った。

「ハア…全く、油断も隙もないんだから……………ん？」

「聞こえたか？」

ソウタの行動に呆れながら着替えを再開したサヨは、何かを感じたのかソウタの方を向きなおす。

ソウタも何か聞こえたのか、サヨに尋ねながらソードガンを手に険しい表情で外に出て、周囲を見渡していると何かを見つけたのか、屈みながらそれを覗き見る。

サヨは着替えを止め、薄着姿で後に続きながらソウタの隣についた。

「あれは……まさかゴブリンか？」

(うう……わ、ゴブリンまでいんのかよ……)

ソウタの目に入ったのは、馬車に乗った老人と女性を襲うゴブリンの群れだった。

「多分……」

早く助けな……「はい待ちんさい」つきや?!」

立ち上がり助けに入ろうとするサヨの腰帯を、ソウタはため息をつきながら引つ張つ

て止めた。

「バカかお前は。

普通にやり合つて勝てる数じゃねえだろ。

それに、ゴ布林つてのは女を玩具にするらしいからな。

その場で犯すか、巢に連れ込んで死ぬまで忌みものにして孕ませ続けるかの2択だ。

あんなに女のお前が助太刀に行つた所でアイツ等のお楽しみが増えるだけだよ。

お前可愛いスタイル良いんだから、そういう所もう少し気を付けて、女の子としての自覚を持ちなさい。

そんな下着が見える様な格好で外に出てきたりなんかして、嫁入り前でしようがみつともない!」

「なっ?!オカンかアンタは!!」

THE オカンな口調で話すソウタに、サヨは顔を赤らめながら、ゴ布林に気付かれない様小さな声で怒鳴った。

「無事に帝都に着きたいなら、あのじいさんと娘さんには悪いがここはやり過ぎした方

「がいいな」

「っ?!」

「でもあのままだと!」

「ああ…じいさんは殺され、ゴブリン連中はあの娘相手にお楽しみタイムだろうな」

「アンタそれが分かってて見捨てるつもりなの?!」

ソウタはああと頷きながらコネクトでプレーンシユガーを取り出し、方張り始めた。

「お前が安全に帝都までの旅を御所望ならな。」

危ない橋を渡る必要がないなら、渡らないに越したことはない。

それに俺は、*“確実に勝てる戦いしかしない”*。

俺がするのは勝てるかもや負けないじゃない、100%勝利の決まった戦いだけだ。  
命がチツプなら…:…尚更な」

冷め切った目、普段のチャラついた雰囲気とは思えないような目と声で話すソウタに、サヨは驚きながらもソウタの意見に反対を示すように睨んだ。

「最低…だったたら私1人で…「だけど」…え?」

「俺はやり過ぎした方が良いと言っただけで、助けないとは言っていない」

フンと笑いながら最後のひと切れを口にし、指についた砂糖を舐めると、ソウタは立ち上がりながらソードガンを肩に担いだ。

それを見たサヨは呆気にとられた表情でソウタを見つめ、口を開いた。

「…何で?」

「あれ、言わなかったか?」

俺はフェミニストなの。

女の子には優しく、激しく、いやらしくがモットー」

ニカツと子供の様にハニカムソウタを見たサヨは、少し嬉しそうに笑った。

「…勝てる戦いしかないんじゃないの?」

「ん…そうだがちよつと違うかな」



ソウタは担いだソードガンを降ろすと、リングを取り出した。

「確かに俺は勝てる戦いしかしらない…

つまりだ……」

取り出したリングを指にはめると、きつきの無邪気な笑顔とは違う、ゲスな笑顔を浮かべた。

「100%じゃないなら、100%にしてやればいい」

《バインド…プリーズ》

リングをバツクルにかざすと、ゴブリン達の周囲に無数の魔法陣が展開され、そこから大量の鎖が伸び次々とゴブリン達を縛り上げる。

その様子を見ながらソウタはブツブツと呟きだしたた。

「出す鎖の数以外に長さも消費魔力と比例するのね…

自身と出す位置の距離は関係ないと…じゃあこっちは！」

右手で鎖をコントロールしながら、左に手にしたソードガンでゴブリン達の頭や左胸、右胸撃ち抜いた。

頭と左胸を撃ち抜かれたゴブリンは力尽き、右胸を撃ち抜かれたゴブリンは、苦しみながらもバインドから脱け出そうと暴れ続けた。

「ゴブリンの脳や心臓、急所は人間と同じ場所にあるのか。

弾丸もコウヤの時に気付いてはいたが、生成する弾の種類で消費魔力は変わると…

今回は鉛にしたが、

コルクへ鉛へ銀の順かな…

他にも飛距離と弾のコントロール、飛距離が長ければ長いほど、コントロールも精密にすればするほど比例する。

…ハア…疲れた。

魔力の残量ギリギリだわ…」

首をならしながら肩を回すソウタ、最初の軽い雰囲気、少し前の冷酷さ、そしてさっきの冷静さ、その切り替え具合にサヨは再び驚いた。

「すご…でも、さつきあんなに冷たい事言つてたのに、何でそこまでするの?」  
「モテたい男は女の子の前でカッコつけるものなの」

ソウタがそう言つて再び笑いかけると、あまりにもバカ過ぎる理由にサヨもつられるように笑いだした。

「フフ…不純」

「男なんて所詮そんな生き物さ」

そう言いながらソウタはコネクトの魔法で何かを取り出した。

「何それ?」

「1日1本しか出せない魔力回復アイテム」

コネクトで缶を取り出し、それを飲み干した。

「多分どっかに伏兵が…っと、言ってるそばからわんさかと」

右胸を撃たれたゴブリンや、ソウタの死角となる馬車の裏に隠れていたゴブリン達が吠えると、茂みや雪に隠れた洞穴から十数のゴブリンが姿を現せた。

「私…アンタとは会ったばかりだから、信頼も信用もない。

してくれなくて良い…でも」

弓に矢をかけながらサヨは立ち上がり、ソウタを真っ直ぐに見つめた。

「私はアンタを信じてみたいから…」

背中…任せて」

「オーライ…なら、援護頼んだ」

サヨに笑いかけると、ソウタは向かって来るゴブリンの群れにソードガンをソード形態に切り替え飛び込んだ。

—————

一方その頃、コウヤはピンチに陥っていた。  
体はボロボロに、額から血を流しながら肩で息をするコウヤの目には、あり得ない物が写っていた。

「なかなかにしぶといな」

「つたりめえだ…こんな事で…くたばる俺じゃ…ねえ!!」

目の前の異形に悪態つくコウヤ。

その様子を見た異形はクスクスと笑いだした。

「そうか……だがコイツ等を相手に同じ台詞を吐けるかな」

異形はそう言った後にパチンと指をならす。

すると異形の背後の扉が重い音を響かせながら開き、中からいくつもの影が姿を表した。

「なんだあ？」

俺をぶつ倒すならもつとスゲエのを……」

近付いてくる影の正体を知ったコウヤの表情は、次第に青くなっていた。

「ウソ……だろ？」

待て……ソレは！ソイツだけは!!」

コウヤの言葉を見殺し、徐々に距離をつめる新たな異形。

「止めろ来るな！」

ピーマンは…：ピーマンだけは…：…」

「ウワアアアアア!!」

婆あああちやああああああん!!」

――――

「いや何があつたんだよっ?!」「キャアッ?!」…アレ?」

馬車に揺られながら眠っていたソウタは、突然目を覚ますと天に向かって叫びだし、同じく隣で眠っていたサヨは驚きの余り跳び跳ねた。



「もうく…何よいきなり…」

「悪い…何かツツコミセンサーが反応した気がしたからさ」

　転んだサヨに手を差し伸べながらソウタは謝罪した。

「アンタってホントに変ね」

「どうかなさいました？」

　ソウタの手を取りながら起き上がり、腰かけるサヨに馬車の前から顔を覗かせる少女が声をかけた。

「いえ…すいません、騒いじやって」

「構いませんよ」

「でも本当に助かりました。」

　帝都まで乗せて貰えるだけじゃなくお金まで」

「(ちん)そ。

　ゴプリンに襲われていた所を助けていたただ上に、道中の護衛を引き受けてくれたので



からかうソウタを押し倒し、サヨは手にしたダガーを再び構えて襲いかかった。

「タツミと言う方は存じ上げませんが、私はお二人共お似合いだと思ひますが」  
「この状況がそんな風に見えるのかいお嬢さん？」

冷や汗を流しながら左手でダガーを持つ腕を押さえ、右手でサヨの肩を押し距離を空けようとするソウタの言葉に、村娘はええと返し顔を引つ込めた。

「ん〜…よし！」

じゃあハツキリさせようぜサヨ。

俺とタツミ、彼氏にして結婚までいくならどつちがいい？」

「ええっ?!」

心配するな。

タツミつて即答してもからかったりしねえからさ」

ソウタの突然の質問に、サヨは顔を反らし少し頬を赤らめながら沈黙した。

「おい、そこはタツミって断言してくれよ。

ガチで悩むとか勘違いしちまうだろが」

「なツ?! ナニツテンノ?!」

べ、別に悩んでなんか無いわよ!!

て言うか変な事言わないで…つよ!!」

「はっ、同じ手を2度も食らうか!」

頭を後に動かし頭突きの体制に入ったサヨ。

ソウタはニヤリとした表情で、左手で掴んだ腕を上へ上げ、膝をついているサヨの両足を自分の足で払った。

バランスを崩した以前に、ソウタの反撃に一時的に宙に浮いたサヨは、驚きの表情を浮かべる。

やったと言わんばかりの表情を浮かべたソウタ、だが…

「…え?」

本来なら落ちてくるサヨを自身の胴体でキャッチする算段だったソウタ。

しかしソウタの予想に反して、上げた左腕がサヨの落下予測位置を変えてしまい、胸元に来るはずのサヨの顔が自分の顔と重なってしまい、2人は小さな声で驚き硬直した。

「あゝ……」

騒いで貰っても構いませんが、積んである酒樽は倒さないで下さ……い」

「……………うむ……………」

ドタンと大きな音を立てた2人に少女は再び馬車の荷台に顔を覗かせる。

そこで目にしたのは、抱き合う様な体勢で互いの唇を合わせるサヨとソウタの姿だった。

「あらあら……お邪魔でした?」

「つぷは?!」

違う! 誤解だ! 事故だ! なあサヨ!

お前も何か弁解を……」

「うそ……私のはじめてが……」

「オイイイイイ?!」

泣くなああああ! 悪かった!

さっきのは事故だからノーカンだ!

あれだ! 人工呼吸と同じだと思え!

そうすれば……な?」

「何がノーカンよ!! 最低!!」

「なっ?!」

俺だっではじめてだったんだよ!

これが人生(前世を含む)初のキスとか俺としても何か不服なんだよ!」

「不服って何?!」

私なんかじゃ不満だと?!

そう言う事?!」

「何でそうなんだ?!」

「あ……喧嘩は……」

「はっはっはっ……いや、初々しいのお……お?」

着きましたよお二方、あれが帝都ですぞ」

「…ふえ？」

互いの頬を引っ張りながら取っ組み合う二人は、老人の言葉に喧嘩を止めて外を見た。

「あれがそうなの？…大きい…」

ねえソウタ！帝都ってあんなに…ソウタ？」

帝都を見たサヨはその大きさに驚き、ソウタに話しかけようと隣を見ると、そこには少し辛そうな表情を浮かべながら無言で帝都を見つめるソウタがいた。

「どうしたの？」

「いや…何でもない…」

それよりタツミ達だ、どうにか合流しないと…」

「そうよね…」

特にイエヤス、アイツ方向音痴だから」

「タツミは主人公補正があるから大丈夫だろう。」

あのバカは……忘れるか。

だから問題はイエヤスだけだな」

「ごめん、いろいろとツツコミを入れたいのだけど…

何でタツミは大丈夫なの?」

「アイツは運に恵まれてるって事だ。」

現にお前みたいな可愛い幼馴染みとか、明らかにモテそうの無い幼馴染みの親友…ど

この古臭いギヤルゲだよ」

「…?、?、?」

羨ましくねえがなと小言を吐きながらソウタは、プレーンシュガーを取り出し口にす  
る。

「タツミやイエヤスを心配してくれるのは有り難いけど…

コウヤ…弟さんは心配じゃないの?」

「アイツなら心配するだけ無駄だ。」

猛獣や危険種相手でも魔法で何とかするだろうし、出来なくても山賊や盗賊ぐらいな



ら襲われても大丈夫だ。

はつきり言つてアイツはかなり強い。

正直俺、アイツとの純粋な殴り合いで勝つた試しがないんだよ。  
てか勝てる気しない」

「ウソ…」

最初の山賊、そして先程のゴブリンとのソウタの戦いを思い出しサヨは驚愕した。

ゴブリンや山賊、桁違いの数を相手にノーダメージで切り抜けたソウタが自分から勝てないと断言したからだ。

コウヤも強い事は山賊の時に気付いていた。

だが先程のゴブリン戦でのソウタを見たサヨには、その言葉が信じられなかった。

心臓や脳、首の動脈など生物の急所を乱戦のなか的確に撃ち抜き、切り裂き、叩き潰す彼の戦いを、実力を目にしたサヨは、驚きから呆けてしまったからだ。

それほどの実力者が勝てないと断言した、サヨはその事実にはただ驚く事しか出来なかった。

「ま、小細工アリ騙し討ちアリ、何でもアリなら負けはしないが…

アイツが負けるとしたら…弱点をつかれるか、純粹に数の暴力ぐらいだろ。ま…後者なら俺と同等か、それ以上の実力を持ったヤツ限定だな。

なんせ前世むじょうじゃ俺に付き合っつて、色々な所に殴り込んだぐらいだからな…

それこそ將軍級の実力とかでないと、多分アイツは止まらないよ」

「アンタ以上って…」

そう言えば、さっきの弱点って?」

「ああ…弱点って言うよりか、苦手なものかな…」

「それって?」

サヨの質問に少し苦笑いを浮かべながら頭をかくソウタは、サヨを真っ直ぐに見据えて意を決した様に口を開いた。

「……お化けと生トマト…そしてピーマンだ」

「……………」

「……………」

帝都の南門

そこを小さな犬を連れて歩く少女がいた。

「ん〜！」

今日もいい天気！

最高のパトロール日和だね！コロ」

「キュウー！」

少女はセリユー・ユビキタス

帝国警備団に身を置く少女であり、隣を歩く犬型の生物、帝具ヘカトンケイルのコロは日課の見回りをしていた。

「な、何だあれえ?!」

門から聞こえた叫び声にセリユーは驚き、声のする監視塔に走り出した。

「どうかしたのですか?!」

「妙な軍勢がこつちに向かって来てやがる!」

慌てふためく衛兵が指差す方角に目を向けると、大きな土煙が上がっていた。

「貸してください!」

セリユーは見張り兵から双眼鏡を借りると、その様子を見た。

「何…アレ…」

目の前に広がる光景に、セリユーは言葉を失った。

じよじよに聞こえるドルンドルンという重低音と、パラリラパラリラと軽快な音を鳴らしながら土煙を上げて近付くそれは……

バイクにまたがる、特攻服を着た野菜の群だった。

様々な種類のバイクにまたがる色とりどりの野菜。

そしてそのバイクに掲げられている旗には、セリユー達の見たことも無い字が書かれていた。

『高丘組』

『生喰上等』

『辺侍駄武流』

『天下一品』

『鮮度命』

驚愕する衛兵達。

セリユーも例外ではなく、迫り来る意味不明に驚いた。

そして何よりセリユー達を驚かしたのは、先頭を走るニンジンの乗るバイク、その後に掲げられた十字架に縛り付けられたもう一人の主人公の姿だった。

皆が警戒する中、突然門から少し離れた場所で野菜達は停車しバイクから降り始める。

バイクから降りた野菜は、ニンジンの乗っていたバイクにかけられた十字架からコウヤを引き剥がすと、勢い良く投げ捨てた。

うつ伏せに倒れ込むコウヤにニンジンは近付くと、その髪を掴み持ち上げた。

「今度ピーマン残したら、この程度じゃすまねえからな？」

わ” あったがあ!!」

ニンジンはそう言って頭から手を離し、コウヤの脇腹に蹴りを入れた。

「行くぜテメエ等!!」

再びバイクに股がったニンジンの叫びに、周りの野菜達は雄叫びを上げながらバイク

を走らせ、その場を後にした。

数秒間の沈黙。

我に返ったセリユーは血だらけのコウヤに駆け寄った。

「あ、あの！」

大丈夫ですか?!

「……もん」

「はい?」

「だって……」

ピーマン……しよっぱいんだもん……」

駆け寄って来たセリユーに、コウヤはまるで時代劇などの女性の様に足を崩した状態で座り込み、よよと口を押さえながら涙を堪え言葉を発した。

そしてセリユーはその姿と言葉に困惑した。

「取り合えず……事情をお伺いしますので、ご同行よろしいでしょうか?」



そう言つてセリユーはコウヤの手を取り、慰めながらその場を後にした。

「しかも……何でトマトも生でしかダメなんだよ……

別に良いじゃん、焼いたって煮たって……

あのグチャツツて感触がダメなだけなのに」

「……………」

—————

「次の方……」

あ……嬢ちゃんも入隊希望かい……

んじゃ、この書類書いてまた持つてきな」

やる気無さげに頬杖をつきながら書類を渡す受付。

彼から渡された書類を読んだサヨは、少しながら不満そうな表情を浮かべた。

「……」

これって一兵卒からなるんですか？」

「当たり前でしょが……」

それにこの時期に入る新兵の大抵は辺境行きだ。

帝都内で働きたいなら、そつから名を上げて出世するこつたな」

アクビ混じりに説明をする受付にサヨは、渡された書類を勢い良く机に叩きつけ、大声で叫び始めた。

「そんな悠長な事してられないわ!!」

私、これでも弓にはかなり自信があるの!!

見てなさい! あそこに掛けてる絵の女にヘッドショットかましてあげるわ!!」

そう言つてサヨは弓に矢をかけ、構えだした。



「あゝ…」

「ありやダメだな…」

（アイツ、タツミと同じ事してらあ）

ーニャー…

サヨが兵舎内で騒ぎを起こす中、ソウタは兵舎外の窓から中を覗きながら、黒猫を頭に乗せプレーンシユガーをほうばっていた。

「あつ…捕まった」

ーナー

ソウタが出入り口の方を見ると、ドアが勢い良く開き、そこからサヨが放り出された。

「いきなり兵舎の中で矢をぶつ放すヤツがいるかあ!!」

こつちとら不況のせいで希望者が殺到して、てんやわんや何だよ!!

雇える数には限界があんだ!

不満があんなら兵士なんざ目指さねえで、そこらの路地裏で体でも売ってるクソガキ

!!」

「なっ?!

アンタ達みたいなのこつちから願ひ下げよ!

バーカ!!」

バタンツ!

激しく閉められた扉に対しサヨは悪態をつくど、ソウタの居る所に戻りどんよりとした表情でため息をすると、膝を抱えながら座り込んだ。

「……お前アホだろ」

ソウタの心無い一言に、サヨは目に涙を浮かべながら顔を上げた。

「ウウ……だつて……」

「いきなり室内で矢をぶつ放す方が悪い」

「ナーナー」

「ほら見ろ……」

猫にもバカにされてんぞ」

「何よ！」

てか、その猫どうしたの？」

「なつかれた」

ーニャー♪

ソウタが頭の上に乗せた黒猫の頭を撫でると、黒猫は気持ちよさげに鳴いた。

「そう……これからどうしよう」

「どうも……どうも……」

あんな騒ぎを起こせば、入隊は無理だな」

「そんなく……」

頭を抱えながら項垂れるサヨの肩に手を置いたソウタは、サヨの正面で同じ目線まで屈んだ。

「入隊という未来の門は固く閉ざされたんだ。」

こうなりややるしかないだろ。

テメエの力で、テメエの意思で…

開くしかねえだろ…

…テメエの股を「不潔!」サイサリスツ?!」

真面目な表情と声で下ネタをぶっこむソウタのアゴに、サヨはアツパーカット打ち込んだ。  
んだ。

「アンタそれ身売りしろって事?!

帝都に着いて早々何させるつもりよ?!」

「じよ、冗談だよ冗談…

本気にするな、軽いジョークだ」

「笑えないわよ…」

再び項垂れながら座り込むサヨ。

痛むアゴを擦りながらソウタは再びサヨの前に立つと、手を差しだし口を開いた。

「ま、気晴らしに町ん中見て回ろうぜ。

運が良けりゃ、何か見つかるかもしれねえしな」

「…うん」



その手を取ったサヨは服に付いた汚れを落とし始めた。  
その様子を見ていたソウタは、足下の猫に視線をやった。

「んじゃ、お前とはここでお別れだ…またな」

ソウタは猫に別れの言葉をかけると、猫も一声鳴いて去っていった。

—————

「……もう一度言ってくれませんか？」

「だ〜か〜ら〜、ピーマン残したらアイツらにリンチされたんだよ」

帝国警備団屯所

そのこの一室に置かれた小さなテーブルを挟む様に、コウヤとセリユーは向かい合いながら話していた。

「アイツらとは……あの野菜の群れですか？」

「ああ……」

ちつくしよニンジンの野郎……今度会ったら細切りにしてリングと一緒にレモン汁に浸けてからマヨネーズかけて食ってやる」

「……………」

困ったと言わんばかりな表情を浮かべるセリユーは、後ろのテーブルで調書を記録している衛兵をみる。

衛兵も似た表情を浮かべながら肩をすかした。

「なあそろそろいいだろ？」

俺、兄ちゃん達探しに行きたいんだが」

しびれを切らしたのか、少し不機嫌気味に尋ねるコウヤの言葉にセリユーは席から立ち上がった。

「人探しですか?!

でしたらお手伝いします!

いえ、させてください!!」

「マジか!」

「はい!」

人探しも世のため、人のため、正義の行いです!

あ!自己紹介がまだでしたね、自分はセリユーと言います!

こっちは相棒のコロです!

「キュイツ!」

「マジでええええええええええええ?!」

自己紹介の後、同時に敬礼をするセリユー達の名を聞いたコウヤは青ざめた表情で叫んだ。

「どっ、どうかしましたか?!」

「いや、ああ…俺はコウヤだ」

(マジか? マジで? マジかよウソだ…)

どろりでどっか見たことある訳だわ)

互いに自己紹介をした2人。

セリユーは衛兵からペンとスケッチブックを借りると、コウヤに質問をし始めた。

「ではその方の特長を教えてください」

「おお、特長なあ…」

腕を組ながら考え込むコウヤは、真っ先に思い付いたソウタの特徴を口にした。

「エロい」

「…は?」

「人畜有害、歩くエロス、存在そのものが18禁。」

サディストもマゾヒストも泣きながら逃げ出させるド変態。  
そんで人を騙すのが得意な鬼畜詐欺師。

おそらく全世界が相手にしたくないヤツランキングで、1位をとるだろう女いじりが好きな自称フェミニスト」

「いえ…あの、内面的な特徴ではなくて、外見の特徴を…「あくあく…みなまで言うな、分かってるよ」…でしたらいいのですが」

コウヤの述べたソウタの特徴にツツコミを入れたいセリユーは、会話を進めるために自身の気持ちを抑えながらコウヤに再度問いかけようとした。

だがそれを理解しているのかコウヤがセリユーの話しを遮ると、セリユーはため息をつきながら再びスケッチブックに目をやった。

「伸長は俺と同じくらいで中肉中背。

髪は黒、後黒いコート着てる」

頷きながらセリユーは、スケッチブックに似顔絵を描き始めた。

「…以上!」

コウヤの言葉にセリユーと衛兵はずっこけた。

「他に無いんですか?!」

「他って言われてもなあ…」

「顔の特徴とかは?」

「顔ね…目付き悪い」

どうすればいいのよとぼやきながら、セリユーはそれっぽい絵を描いてはコウヤに見せ、コウヤが首を横に傾けては描き直し、再びみせる。

そうこうしている内に、すでに小一時間が過ぎていた。

(にしても参ったなあ…)

兄ちゃんはぐれるとは…

アイツの行きそうな所…風俗街?

いや、兄ちゃんアレで以外とヘタレだしな…

まああの変態はほつといっても大丈夫だろ。

つか帝都到着してから即行でセリユーちゃんと遭遇つて。

せめてナイトレイドに入ればタツミとは合流出来るんだが…)

「…そうだ」

考え込むコウヤ。

瞬間何か閃いたのか、パンツと両手を叩くとセリユーを見つめて口を開いた。

「なあセリユーちゃん、聞きたいことあるんだけど」

「今度は何ですか？」

疲れている様のため息を交えながら応えるセリユーに、コウヤは満面の笑みで口を開いた。

「ナイトレイドって、どうやったら入れんの？」



「すごい！」

これが帝都か、  
ねえねえ！

――

あれ何かな!

あ!あれって服屋かな!」

帝都内の商店街

人と活気が集まる賑やかなそこに、サヨとソウタは訪れていた。

「ずいぶんと回復早いな…

落ち着けおのぼりさん。

あんまし騒ぐと、周りの迷惑になるぞ」

「うう…ごめん」

「分かれば良いんだよ。

とにかく、あんましウロチヨロするな。

まだ何かあるか分かったもんじや…って言ってるそばから!」

ソウタがため息をつく一瞬で、再びサヨは姿を消した。

愚痴りながら辺りを見渡していると、装飾品店を眺めるサヨが視界に入る。

ソウタは再びため息をつく、サヨの隣に足を運んだ。

サヨの見つめる先には、透き通った淡い水色の宝石が詰められた、銀のネックレスが置かれていた。

「欲しいのか？」

「ぜ、全然?！」

村にはあんなのが無いから、珍しかっただけよ！」

「はいはい……」

否定こそしても、サヨの目はネックレスから離れる事はなく、その様子を見たソウタは頭をかきながら大きなため息をつく、店の中へと足を運んだ。

「すいませーん、あれっていくらですか？」

「金貨2枚と銀貨6枚です」

店員の告げた値段にソウタは唖った。

金に関しては、山で出会ったマッチョの親切なオッサン達くれたので何とかなる。問題は値段だ。

市場に着いてから様々な店を見渡し、そこに置かれてある物とその値段、それらの物価からすでにある程度の帝都内での為替相場、単価を理解していたソウタは苦い表情を浮かべた。

「結構するな……まあワビにはちようど良いか」

「毎度あり〜。」

「頑張ってくださいね♪」

「……………」

何を勘違いしているのか、ニヤケ顔で見送りをする店主にため息をつき、ソウタは商品が入った紙袋を持って店を出た。

「あつ……」

「ほらよ」

「え?」

「あ〜……あれだ。」

「裸見ちまったのと、馬車でのアレのワビ」

「ウウ…何か変な気分だけど、ありがとう！」

唸りはしたものの、明るい笑顔で素直に喜ぶサヨはソウタに礼を言うと、紙袋を開けた。

（どこに行っても、女つてのは変わらないんだな…

アイツもプレゼントやった時に同じような表情かおしたっけかな…）

サヨの喜ぶ姿を見たソウタは、前世過去を懐かしむ感情から表情を緩め、目をつむった。

しばらくしてサヨに目をやると、首を傾げながらネックレスを凝視している姿が目についた。

「どうかしたか？」

「これ…どうやって着けるの？」

「…貸せ」

予想外なサヨの一言にソウタはため息をつく、額を押さえながらサヨからネックレ

ス受け取った。

「…ほらよ」

「ありがとう」

札を告げ、くるりとソウタの方に向き直すサヨは、少し顔を赤らめながら笑った。

「似合うかしら?」

「ッ?!」

その笑顔に不意を突かれたソウタは少し顔を赤くし、とっさにサヨから目をそらした。

「…ソウタ?」

「ア…ニアウニアウ」

「ちよつと?!」

「何で空を見上げながら言うの?!」

「良いだろ別に…似合ってるから安心しろ」  
「説得力皆無よ…もう」

そう言つてサヨは頬を膨らませながら歩いていった。

微笑ましいの光景の中、ソウタはこれから起きる悲劇の1つを案じ、暗い表情を浮かべた。

(何でこんな娘が死ななくちゃいけないんだ…)

これから先の事を考えるなら、サヨは死ぬべきだ…

サヨの死は、タツミの起爆剤になる。

サヨの死で、タツミの物語の始まる。

サヨの死が、タツミを強くする。

(でも…)

サヨが死ななかつたら？

タツミはどうなる？

ナイトレイドはどうなる？

未来は？物語はどう進む？

未来を、物語を知るからこそその葛藤がソウタを襲った。

(やっぱし、サヨは死ぬべきなのか？)

〈また見捨てるのね〉

(…違う)

〈犠牲が必要なんだろう？〉



(違う)

〈今までそうして来たんだ…

今更何が違うんだ〉

(違う俺は、もう…)

〈お前は変われ無いよ。

お前はお前のままで…〉

(それでも俺は、アイツと…)

〈貴方は彼とは違う、だからあの娘も私たちがみたいに…

…「殺すんでしょ?」

「ツ?!」

自問自答。

頭をかきながらため息をついたソウタは、側に置かれた木箱に腰かけて空を見上げた。

「『あん時』までの俺なら、こんなことで悩んだりしないんだろな…」

てかゆりつぺのヤツ、俺の事知ってこの世界に送るのだったら、記憶消して欲しかったな…ま、この記憶消してたら何の役にも立たず、前任達の二の舞だろうけどな」

昔を思い出しながら自虐的に笑うソウタ、すると足元に何か当たると感じる感触を感じ、下を見た。

「ニーヤー?」

「何だまたお前か…」

ーニャー♪

「……だな…悩むのはやめだ。

俺はフェミニストだ。

女の子には優しく、激しく、いやらしく…

そんでその幸せを守る…だったよな、相棒…」

何かを懐かしむように再び空を見上げるソウタは、何処と無く寂しげな表情を浮かべていた。

「俺達がいる時点ですぐにに物語が壊れてんだ、ならやりたいようにやるとするさ」

足下の猫の頭をワシワシと掴みながら撫でると、猫はウニャと短く鳴くと体を擦り寄せる。

「なってやるよ、今度こそ…」

テメエが言つてた、<sup>「ヒ」</sup>最後の希望<sup>「ロ」</sup>だつてやつに……」

足元の猫を撫でるソウタの表情は、さつきまでとはうつつ変わつて強い覚悟を感じさせるような笑みを浮かべながら呟いた。

「ねえソウタ!

この人達、私達を雇つてくれるつて!

使用人兼衛兵としてしかも住み込みで!

これで宿も職も解決よ!

それにお給料も色つき、これで少しは村の皆に樂させてあげられるわ」  
「よかつたなあサヨ。」

……ん? 待て、私<sup>「達」</sup>だと?」

嬉しそうに戻つて来たサヨの言葉に疑問を抱いたソウタが質問しようとした瞬間、サヨの後ろから数人の衛兵と共に一人の少女がやつて来た。

「はじめまして。」

貴方がサヨさんのお連れの方ね？

私はアリアって言うの。

これからよろしくね」

「ああいや、俺は別……に……」

「どうかしたの？」

「おおい、ソウタ〜？」

衛兵を連れた金髪の少女、アリアが自己紹介をすると、ソウタはまるで蛇に睨まれたカエルのように固まった。

サヨが顔を覗き込ませたり、ソウタの目の前で手を振ったりとしたが反応は無く、ただダラダラと妙な汗をかきながらソウタは小刻みに震えていた。

(……はっ……えっ？)

……s a d i s t i c p r i n c e s s ?

サド貴族のアリア様をご光臨なされましたが……

もしかしてコイツが召喚したのか？

この小娘、自分を殺す事になる相手連れて来やがったぞオイ……

鴨が鍋と食材一式揃えてプロの料理人連れて来ちゃったよ。

どうすんのコレ…

俺がわざわざ中二病を再発させてまで、シリアスな雰囲気の中カッコ良くフラグブレイクの案を考えてる間に、なあにコイツ自分でフラグ回収してんの？

バカなの？死ぬの？

ホントどうすんだよ…もう……アレ？

でもサヨの時も思ったが…実際に実物を見るとアレだな。

アリア様かわいいわ…結構好みかも。

これでも…少し胸が大きければな…

いや待てよ…むしろ今のアリア様はこの体型だから完成しているのではないだろうか。

素直で無垢な表面にちよつと？Sっ気を帯びた内面。

明るいその笑みの裏で内心、

へへ…また良いおもちゃゲツト♪

どう遊んで上げましょうか、フヒヒヒヒ…

とか思ってるんでしょ？

そういうの見てると…こう…



……調教したい……

そうです、私もそっち側です。

ちなみに私、Mの方よりこういったSつ気を帯びた子をいじる方が好きなんです。

Sの方は弄って恥辱と屈辱を与え、

Mの方には逆に私を責めて頂くのが、私のplay styleです。

Sは自分のしたい事を奪われ、Mは自分がされたい事をやらされるなんて、屈辱以外何物でもないでしょ？

でも私は貴女みたいに非人道的な事はしませんよ？



そんな焼いたり、切ったり、抉ったりしませんよもったいない。まああ？傷物にする…って意味合いなら手は出しますが。

それでも向こうから求めて来ない限り、手は出しませんよ絶対。互いの合意が、愛があつてこそでしょそういうのは。

そんなかわいい女の子の心や体に痕が残るような酷い事はしません。

私はサデリストである前にフェミニストなのです。

女の子は優しく、激しく、いやらしくいじるのが好きなんです。

比喩的にも、物理的にも。

そうです私はSです。

SOUTAのSはサドのSなのです、はい。

そう考えると、ホントにアリア様は私のツボ心得てますわ。

ちよつと背伸びした感じの振る舞いに年齢相応の乙女感、最高じゃ無いですか。正直、ドストライクです。

あ、でも私はロリコンではありませんよ？

しつこいかも知れませんが、私はフェミニストなのです。

見た感じ14〜16くらいかな…

この娘の5年後ぐらいが楽しみだ。

では想像してみてください。

このアリア様が恥辱に顔を赤くしながら自分に屈伏して言いなりになる姿。

そして最後には「デレてなついて、昼は眩しい笑顔で後ろから「お兄さま♡」や、「ご主人様♡」と抱き付いて来たり、夜は淫乱になって物欲しそうな表情でよがって来る光景。

興奮しません？

共感して貰えるその貴方、握手をしましょう。

Nice to meet you 私はソウタ。

貴方の魂の友人です。

…って、ふざけてる場合じゃ無かったあ！

あまりの緊急事態に気が動転して煩惱覚醒してからの野獣解放するところだったあ  
！)

「あゝ……ソウタです……」

「よろしくねソウタ。」

そこに馬車を待たせてあるわ。

時間も時間ですし、夕食を御一緒にしましょう？

「馳走するわね」

「いや、だから俺は…」「ありがとうございます!」…っっておまつ…」  
「じゃあ行きましょ」

そう言つてアリアは馬車を停めている場所へと歩き始めた。

サヨと共に続くように歩み出すと、ソウタは頭を掻きながらため息混じりにぼやき始めた。

「たつくよ…」

原作のタツミみたく、ナイトレイドの襲撃からの転職ですか？

ここに居るの、タツミじゃなくサヨだよ？

おい作者、寝ぼけてんの？

まだレオーネに会って無いぞ？

あの素晴らしきオツパイを見ずに、いきなりペツタンコアリア様ですか？

まあタツミみたいにとつて食われる訳じゃないなら、豪勢なタダ飯食らつてから考え

…」

サヨには聞こえないよう少し離れて歩いていったソウタは、急に足を止めた。

(……ん？待て飯だつて？)

これつて……もしかしてタツミのじゃなくてえ……

サヨ達が捕まったイベントじゃね？

……あれ？イエヤスがいないよ？

イエヤスがいないって事は……

俺が……

イエヤスの代わりに……

奥様の日記に載るの？

俺……ルボラend？

何それちよーウケる)

「ほくらー！何ボケツとしてるの、行くよー！」

立ち止まっていたソウタに気付いたサヨは、楽しそうにウキウキとソウタの手を引いて歩く。

サヨの笑顔を見たソウタは、何かを悟ったかのような柔らかい笑みを浮かべ歩き出す。

(しかもコイツあれだ、ポンコツだ…)

なんてこった、サヨさんポンコツでしたか。

てかどこで死亡フラグ立てたんだけ？俺……)

地獄行きの馬車に乗る際、穏やかな表情をしたソウタの目から一筋の雫がこぼれていた事は、置いていかれた黒猫以外、誰も…知らない。

走り出す馬車に揺られながら、遠い目で空を見続けるソウタ。  
無数の衛兵に囲まれ緊迫した空気の中、事態が理解できないコウヤ。

(ひよつとしなくても、今のこの状況…ヤバくね?)

転生を果たした魔法使い<sup>バ</sup>2人は、偶然にも同じ事を思っていた。

魔法使い

残り 2人 (WARNING)